

第4章 当該地域の現状

1 歴史的環境

(1) 船来山および周辺の歴史概要

【弥生時代以前】

船来山周辺における人類活動の痕跡は、南麓の弥勒寺遺跡や席田郡府遺跡などから出土した石器、土器等により旧石器時代終わりから縄文時代早期に確認される。石器の石材を見ると、根尾川系のチャートのほか、根尾川筋では見られない火山岩や長野県和田峠産のもの、奈良や北陸方面産出と考えられるものがあり、これら各地との交易があったことが分かる。

弥生時代になると、根尾川の水利により水稻耕作がはじまり、扇状地の微高地上に集落が形成され、共同体的な村が発生した。中には生産を増やし、より豊かな富と力をもった首長的なものがあらわれてきたのもこの頃である。船来山からは、約1800年前の方形周溝墓が見つまっていることから、すでに山麓に居住区があったものと考えられる。

【古代（古墳時代）】

古墳時代前期は平野部に宗慶大塚古墳が築かれるほか、太平山などの丘陵地に古墳が築かれる。前方後円墳としては西峯前方後円（方）墳、八幡神社裏山古墳、宝珠古墳があり、船来山には、62号墳や5号墳など、9基以上の前方後円墳がある。

古墳時代中期には、文殊古墳や船来山81号墳などの古墳が築かれる。これらの古墳からは、円筒埴輪片が採集されている。しかし、中期の古墳は圧倒的に少ない。81号墳は、弥勒寺境内に位置し、境内には68号墳などの比較的大型で残存状態の良い未調査の古墳が存在しているため、弥勒寺を中心とした船来山の谷に、中期の古墳群が今後発見される可能性も考えられている。

古墳時代後期になると、古墳の数が爆発的に増加する。船来山古墳群では、ほとんどの尾根筋に古墳が重なり合うように造営されている。副葬品も豪華絢爛で、多くの装身具、武器類、土器などが出土している。特筆すべきは、現在岐阜県内で5基確認されている赤彩古墳のうち、3基が船来山の小字「郡府山」と呼ばれる尾根筋からまとまって発見されている点であり、これらの古墳からは、雁木玉、トンボ玉などのガラス玉のほか、馬具、太刀などの鉄製品などが大変多く出土している。

このほか、船来山の北にある権現山南麓には法林寺此奥古墳群が25基で構成されている。さらにスボミ丸山古墳群、スボミ東・西古墳群、太平山の西ノ門古墳群など、多数の古墳群も確認されている。船来山に古墳が造営されたほぼ同じ時期に、市内でも古墳が造営されている。

【古代（奈良～平安時代）】

古代律令制下に編纂された『古事記』には「本巢国造」「三野国造」とあり本巢の地名を確認することができる。また、平城京跡の木簡には三野国本須郡三野部と見え、『倭名類聚抄』記載の本巢郡美濃郷に比定されている。現在も「見延」という地名も残されている。大宝2年（702）正倉院文書御野国戸籍に本簀郡栗栖太里とした記録が残っている。

天武天皇の治世下には、大規模な条里制が敷かれ、東西方向の条の線と南北方向の里の線による碁盤目状の区画は、現在も確認することができる。

『続日本紀』には、和銅8年（715）、尾張国の人が新羅人を率いて席田郡を創建したとある。当時の本巢市域に建立された古代寺院としては、市南部に弥勒廃寺、席田廃寺、文殊廃寺が知られている。

『日本三代実録』によれば、仁和3年(887)に美濃国分寺が火災で壊滅したので、国司が願い出て、殿宇宏麗であった定額尼寺を国分寺の代用とすることが許されたとある。石原の八幡神社一帯が定額尼寺跡と推定されており、境内からは、礎石、古代瓦が発掘されている。

陽成天皇が即位した元慶1年(877)、大嘗祭のための悠紀に席田郡が卜定され、新穀が都に献上された。

安和2年(969)、関白太政大臣藤原実頼の屋敷で催された新年祝賀で、席田の糸貫川に住む鶴を歌った催馬楽の曲「席田」が歌われた。また、平安時代中期に成立した枕草子や源氏物語では催馬楽「席田」が取り上げられている。

【中世（平安～戦国時代）】

中世に入っても、この地域の「糸貫川」「席田」「舟木山」が歌枕として詠み込まれており、「舟木山」を詠んだものとして、『後拾遺集』の右大弁通俊や『新勅撰集』の権中納言経忠、『藤川記』の一条兼良の歌が知られている。

承久3年(1221)に起こった承久の変では、北条時氏が率いる幕府軍が「菰田」で上皇軍を追撃したことが、『北条九代記』、『吾妻鏡』に記されている。この時の戦場は、東山道が糸貫川にさしかかったあたりであると考えられている。

中世を通じて、菰田荘をはじめいくつかの荘園が営まれた。在京の寺社、貴族、武士や在地の地頭による支配も見られ、優良な農地をめぐって流動的な所有により、支配権は複雑化した。

戦国時代には船来山付近一帯の地域は、美濃国守護の土岐氏やその家臣であった斎藤氏によって支配されており、後には織田氏などが支配した。船来山には斎藤道三に追われた土岐次郎政頼が「菰田の砦」を築いたとされ、土岐氏の根城とされている祐向山城の前線基地としての位置づけも指摘されている。

古田織部は本巢に生まれ、戦国武将として織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えとともに、千利休の茶道を継承して茶人として活躍し、茶器の製作や、建築や作庭の分野でも後世に大きな影響を及ぼした。船来山周辺は戦国時代の乱世のなかで文化的な交流も活発に行われたこともうかがわれる。

【近世（安土桃山～江戸時代）】

近世には水田をはじめとする農業生産をめぐり、船来山付近一帯の集落間で様々な争論が起こった。1530年の根尾川の大洪水の後、席田用水や真桑用水といった用水路をめぐり100年以上にわたり争いが続いた。また、糸貫川などの氾濫により河道が変わり、氾濫原の開墾や草場の入会をめぐっても争いが起こった。この時期、用水の水利をめぐる争いにともない、取水口や水路敷の改修や広域な農地開発が行われることにより、用水を取り巻く歴史的に特徴のある景観が流域に形成された。

近世初期には名古屋城が築城され、多数の大名が負担する大規模な工事となったが、石垣普請に船来山からも石材が調達され、船来山は石切り場として開発された。

近世の税に関わる記録により、この地域から枝柿、鮎、真桑瓜などの特産品も納められていたことが分かっている。扇状地の排水を活用した果樹、河川の中流で営まれる築漁、名古屋という近世都市の近郊に発達した蔬菜園芸など、現在に続く生産風景もこの時代に発達したと考えられる。

【近代（江戸～現代）】

近代に入り、蓑虫山人が船来山を訪れており、「船来山図絵」として船来山から眺望した絵を残している。近代においても、船来山や糸貫川が歌枕の名所として認識されていたことを示している。

明治末期からは、富有柿の栽培が始まり、大正時代に開墾が進んで、船来山の周辺に富有柿畑が広がり、地域の特産品となっている。

明治24年（1891年）濃尾地震が発生し、根尾地域に大規模な根尾谷断層が現れた。濃尾地震の災害を伝える歴史資源として、根尾川水系の水害の記録とともに後世まで伝えられるべきものである。

このように、船来山及び周辺の歴史を概観したとき、縄文時代の狩猟採集文化や弥生時代の稲作文化がこの地域でも営まれている。古墳時代には、船来山を中心とした特徴的な古墳群からも推測できるように、先進的な文化に発達していた。

船来山古墳群は、前期古墳と後期古墳が重なるように多数分布しており、古墳時代を通じた古墳の形態や埋葬物の移り変わりをを見ていくことができる。これは日本列島全体でとらえたとき、中央集権的な権力の勢力範囲が地方にどのくらい及んでいたのかを知る上でも重要な指標となることを示している。

古代から中世にかけての歴史からも、船来山周辺が生産地として中央からも重視されていた様子が見えてくる。東日本に政権が移った鎌倉時代以後、有力な貴族や武士の所有や戦場の場ともなり、列島の東西の文化が交流した。

近世以降は、水路網の整備などにより生産基盤をさらに発達させ、また、地域の資源をいかした特産物も生産するに至っている。

船来山と周辺は、東西日本の間にある中部日本の歴史を特徴的に現代に伝えている。

表 4-1(1) 船来山および周辺の歴史の流れ

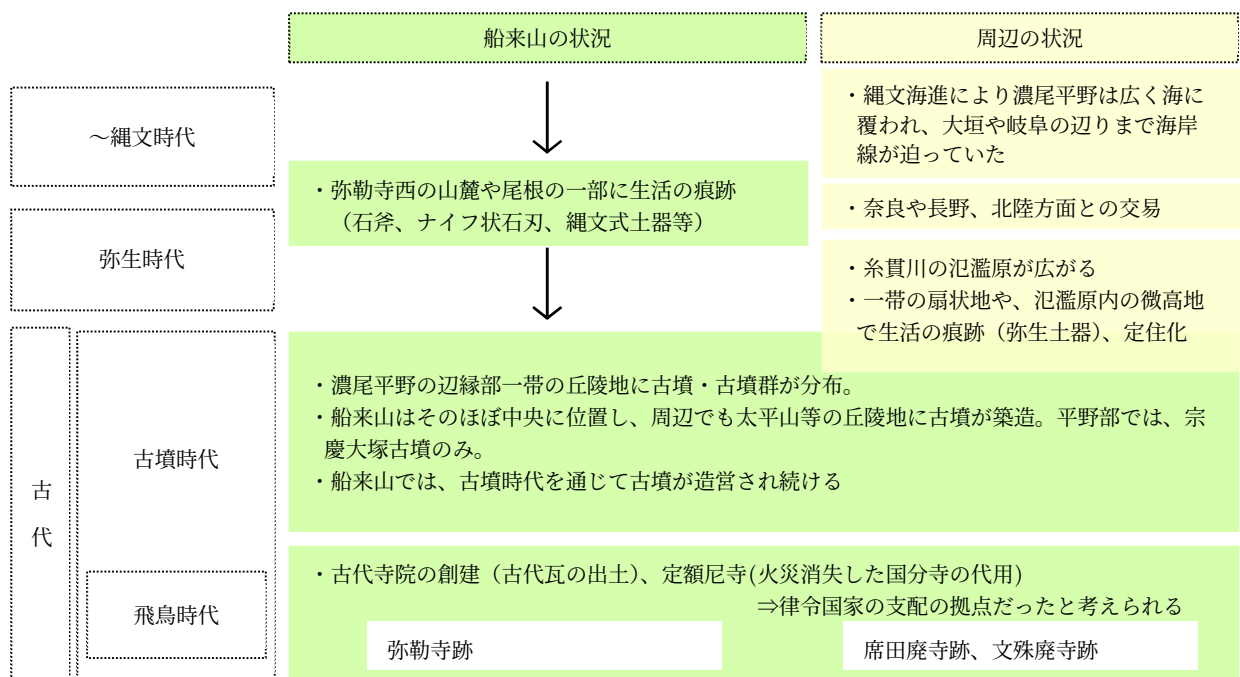
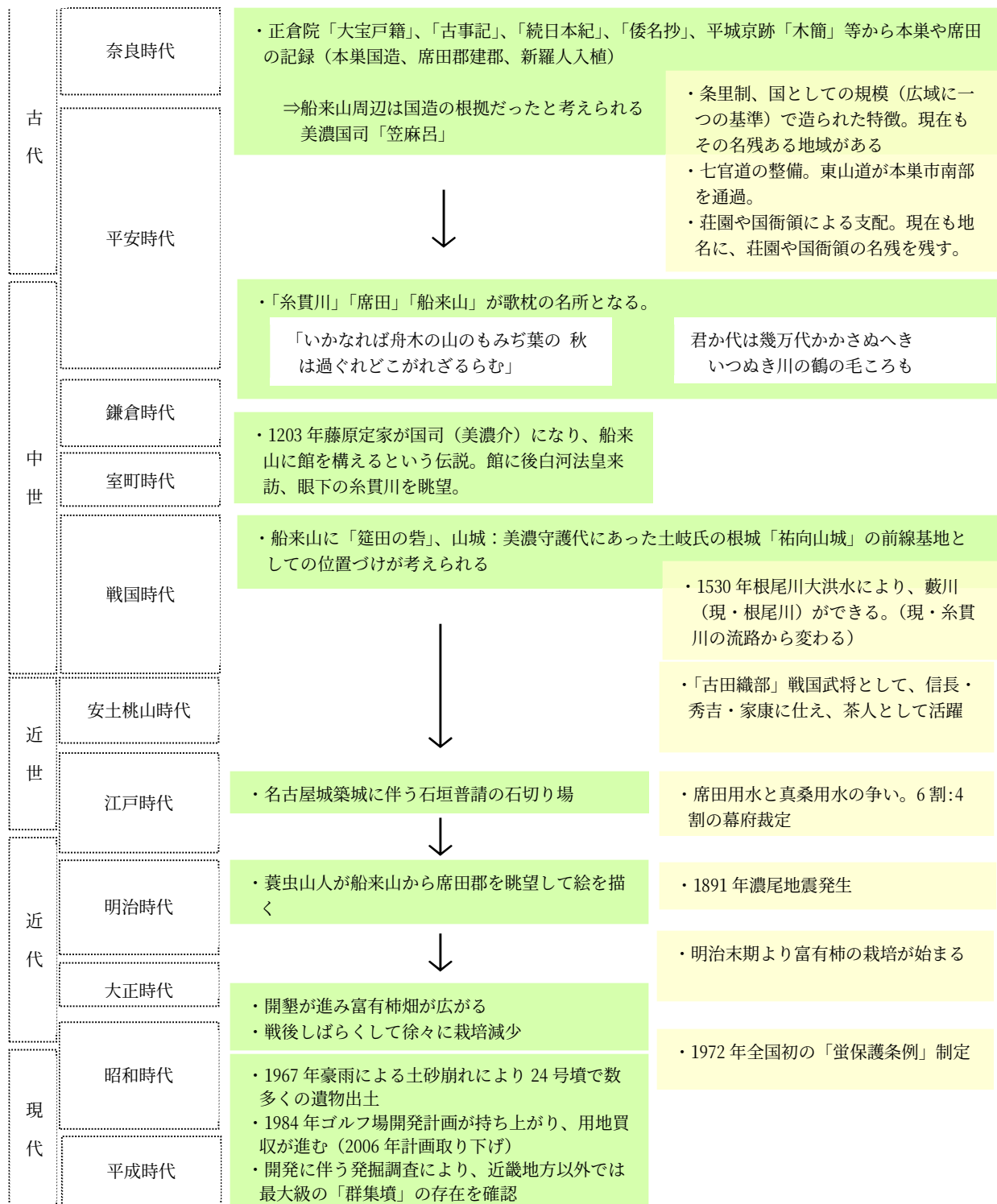


表 4-1(2) 船来山および周辺の歴史の流れ



【席田郡建郡の歴史的背景】

■美濃守笠麻呂の功績（北村安裕 2015）

※『古代と未来のかけ橋 船来山古墳群 2 ～席田郡建郡 1300 年記念船来山古墳群報告会資料集～』（2015）より抜粋整理

席田郡は、715 年（霊亀元年）に尾張国の席田君邇近が新羅人 74 家を率いて美濃に移住したことに始まる。この時、美濃守（行政のトップ）に就任していた人物が笠麻呂である。

笠麻呂は 706 年に美濃守に就任されてから、720 年に右大弁（中央の高官）となり都に戻るまでの間、15 年近くも美濃守の地位にあり、これは国守の在任期間として最長といわれている。

笠麻呂はこの長期の赴任の中で、席田郡建郡に関わり、美濃国の基礎をつくった重要な人物である。

[笠麻呂の主な事績]

706 年（慶雲 3 年） 美濃守に就任する。

709 年（和銅 2 年） 美濃の不破関などを巡視した藤原房前（右大臣不比等の子）の報告によって善政が褒められ、褒美を与えられる。

713 年（和銅 6 年） 「吉蘇路」を開通させる。

716 年（霊亀 2 年） 尾張守を兼任し、木曾三川沿いの広大な地域を管轄する。

717 年（養老元年） 元正天皇が美濃国に重ねて行幸する。この旅を契機に「養老」の年号に改元される。

719 年（養老 3 年） 「按察使」に指名され、美濃・尾張・三河・信濃の 4 カ国を統括する。

720 年（養老 4 年） 右大弁となり、都に戻る。

721 年（養老 5 年） 元明天皇が崩御すると出家し、政界を引退する。

723 年（養老 7 年） 筑紫観世音寺（福岡県太宰府市）の造営を担当する役目で、九州に派遣される。

笠麻呂が美濃守の任のあった和銅～養老期（708～723 年）は、元明天皇・元正天皇の治世に重なり、右大臣藤原不比等（720 年没）が辣腕を振った時期でもあった。701 年の大宝律令が社会に根付き始め、710 年には平城京へ遷都し、古代国家は新たな段階に入ろうとしていた時期である。

この時期は、日本史上最も集中的に国郡の再編が行われ、多くの建国、建郡が進んだほか、『風土記』の編纂などにより、地方の情報を積極的に把握し、実態に応じて行政単位を再編成しようとしていた。また巡察使や按察使の制度によって、より広域の行政圏の構築も図られていた。

このように、美濃国における席田郡建郡、按察使として尾張・三河・信濃を管轄、「吉蘇路」開通など、笠麻呂による数々の業績をみると、笠麻呂は長年にわたって美濃を治めたばかりでなく、和銅～養老期の特徴的な地方政策を実践し、場合によっては牽引する立場にあったと考えられる。

席田郡の建郡をめぐるのは、水害で荒れた土地の再開発を担うためであるとか、本巢国造の後裔となる豪族の力を削ぐためであるとか、さまざまに考えられてきた。

しかし、席田郡は全国的にみても狭い郡であり、新羅人集団を核とした建郡であったことから、笠麻呂は、自己の地方統治に関わる何らかの意図を持って、比較的豊かな土地を提供して新羅人集団を誘致した可能性が高い。

新羅人の土木技術、あるいは、地方政策を推進するための知識や文筆能力を必要としたのか、同じように新羅人集団が核となって建郡された上野国多胡郡や武蔵国高麗郡とも比較しながら、さらなる追求が必要と考えられる。

席田郡建郡については、まだ謎が多いが、文献が少ない中で和銅～養老期という時代を考えていく上で重要な鍵となると考えられる。

■船来山と舟木（船木）部（田島公 2015）

※船来山は、中央政権が「船木」（船材）を伐採するための山であり、その麓に伐採や製材に関わった屯倉が存在したという可能性を、文献資料や考古学の成果、系図の記載、地名・神社などから探っている。
『古代と未来のかけ橋 船来山古墳群 2 ～席田郡建郡 1300 年記念船来山古墳群報告会資料集～』（2015）より抜粋整理

[船来山と満誓が詠んだ和歌との関係]

俗世の姿が元美濃守の笠麻呂である筑紫歌壇の一人、満誓は、『万葉集』に複数の和歌を残している。そのうちの一つに、席田郡の北限に位置する船来山を説明する際に必ず引用される和歌がある。

「鳥^{とぶさ}総立て 足柄山に船木伐り 木に伐りゆきつ あたら船木を」

[従来の解釈] 鳥総を立てて、足柄山で船材（の良木）を伐り、それをただの木として（容易く）伐って行ってしまったよ。惜しい（もったいない立派な）船木だったのに。

冒頭の「鳥総」とは、従来は^{きこり}樵が切った木の梢をその切り株に立てて山神を祭ったものとされるが、最新の研究によれば、鶏の鶏冠の意味であり、形状の類似から「鋸」を意味するという。すなわち、「鳥総立て 足柄山に 船木伐り」の歌意は、美濃守であった笠麻呂が、本巢郡（分郡後は席田郡）の船来山の樹木を伐採して、鋸を用いて準構造船を造るための「船木」（船材）に加工をしていたことを背景に、比喩的に詠み込んだ歌ではないかと推定される。

船来山は、「雑令」9 国内条にいう「禁処」（天皇の独占空間）であり、遅くとも推古朝（7 世紀初頭）には、船来山やその南麓は中央政権が三野（本巢）国造領域に設置した「王領」の一つであった可能性がある。

[船来山南麓地域の景観・役割-「屯倉」の存在の可能性を探る-]

船来山は山頂から麓に至るまで、3 世紀～7 世紀末の約 300 基に近い古墳が確認されており、埋葬地に利用されていたが、景観としては山の大半は常に樹木が生い茂っていたことから、大部分は「船材」に用いる樹木が生育する場所であったようである。

限られた文献資料のほか、考古学の成果や系図の記載、地名・神社などを援用すると、以下の点などから、船来山南麓には、「屯倉^{みやけ}」が存在した可能性がある。

- ・中央政権の禁野（禁処）や屯倉の守衛したことにそのウジ名の由来がある「守部氏」が存在する
- ・白鳳寺院弥勒寺の存在、「郡府」地名や発掘調査により郡家推定地の遺構が発見されている
- ・春稲神社の存在は、付近に屯倉が存在したことをうかがわせる（「御野国本簀郡栗栖太里戸籍」にみえる「春米部姉賣」、『日本書紀』による茨田屯倉と春米部が同時に設定された伝承、春稲神社奥の院の御神体とされる大石が席田君邇近の墓との伝説から）

[舟木（船木）部と古代糸貫川・長良川の水運]

『倭名抄』本巢郡船木郷は中央政権が三野（本巢）国造の領域内に設置した舟木（船木）部に由来するが、船材用に伐採された船来山の樹木は、その南麓に置かれた屯倉で製材・加工され、当時の大河・糸貫川や席田用水のようになった川を利用し、舟木部の集落（船木里（郷））まで流したと想定される。

席田郡南部は官道の東山道と糸貫川との水陸交通の結節点に近く、糸貫川は船来山南麓の屯倉と舟木部が設置された地とを結ぶ役割も果たしたと推定される。また美濃と尾張間の河川交通が古代から盛んであったことが既に指摘され、長良川と伊勢湾の水運を利用すれば、造船技術に長けた猪名部氏の本拠のある伊勢国との交流が可能である。尾張国からの新羅人移住にも水運が使用され、本巢の船

本部は内陸水運用の船を造っていた可能性もある。

席田郡建郡に際し、新しい生産技術を持った新羅人集団を、糸貫川東岸、船来山南麓に移住させた歴史的な背景として、それ以前の時代から中央政権により、船来山が「禁処」となるなど、「王領」の設置が進み、そうした地域を中心に新羅人集団を移住させ、開発や生産指導が行われていた可能性が考えられる。

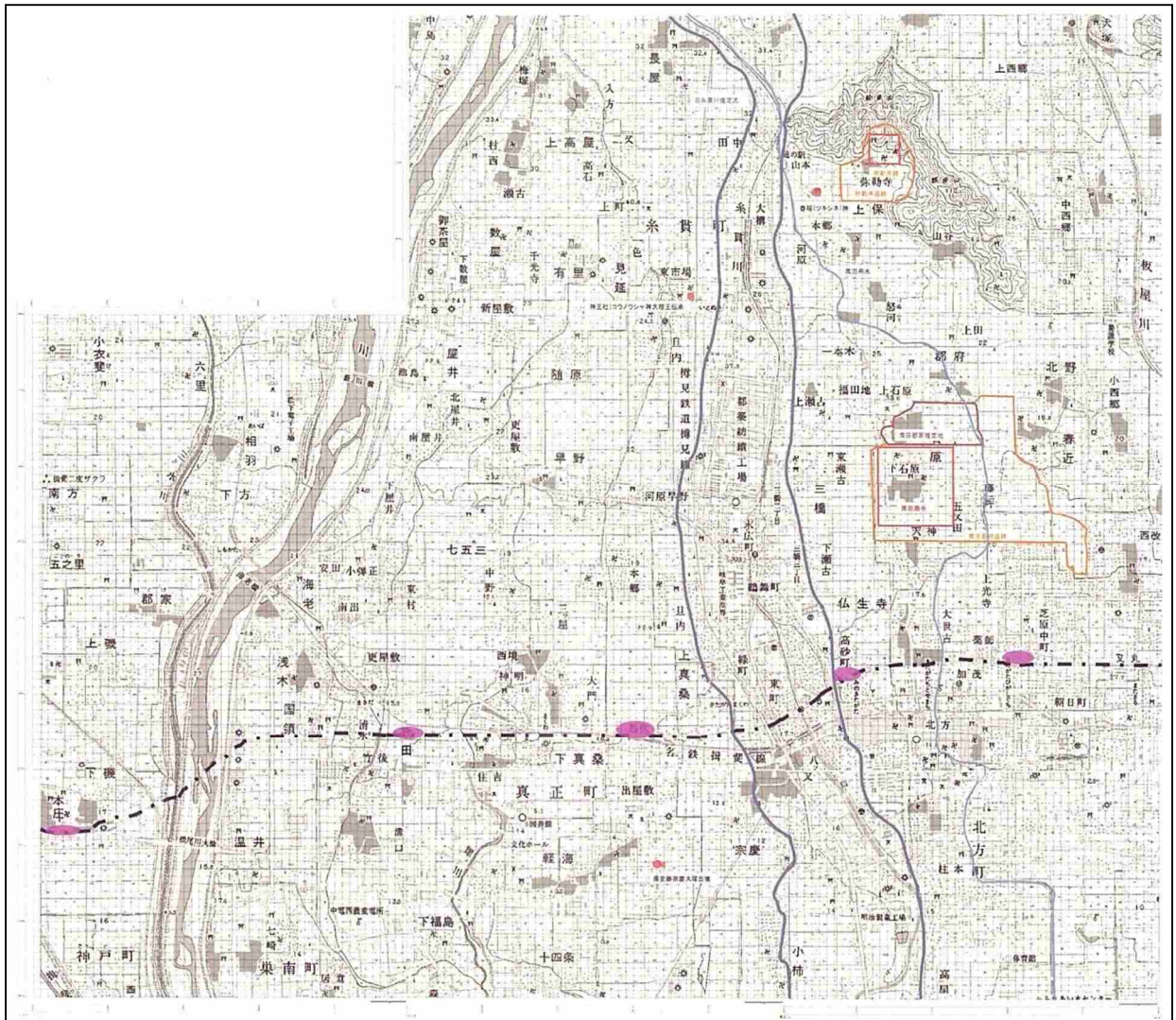


図4-1 旧糸貫川、席田用水、東山道推定ルート
(ピンクの網掛けは仙道地名が残る所。点線が推定ルート)

※『古代と未来のかけ橋 船来山古墳群 2 ～席田郡建郡 1300 年記念船来山古墳群報告会資料集～』
(2015)より転載

(2) 船来山古墳群と周辺古墳群

船来山古墳群が形成された同時期に濃尾平野周縁部の山麓では、数多くの古墳群が造られている。ここでは、これらの古墳群の分布状況とその概要を整理し、周辺古墳群からみた船来山古墳群の特徴について現在分かっている点について示す。

①周辺古墳群の分布とその概要

船来山の北方の太平山や権現山などの丘陵地に、「文殊古墳」や「西峯古墳群」、「法林寺此奥古墳群」、スボミ丸山古墳群、スボミ東・西古墳群、西ノ門古墳群などが多数の古墳群が確認されている。

船来山西方には、大野町の国指定史跡「野古墳群」、池田町の県指定史跡「願成寺西墳ノ越古墳群」、養老山脈の「象鼻山古墳群」、国指定史跡「円満寺山古墳」、東方には、金華山の岐阜市指定史跡「瑞龍寺山墳丘墓」など、濃尾平野の縁に沿って多くの群集墳が分布する。

表 4-2 主な周辺古墳群の概要

名称	市町	時代等	出土品
文殊古墳	本巣市	5世紀代の円墳の可能性	円筒埴輪片
宝珠古墳群	本巣市	昭和40年代に消滅した前方後円墳宝珠古墳をはじめ、大平山にかけて広がる古墳群である。	
西峯古墳群	本巣市	太平山山頂から山麓にかけて分布の可能性 山頂部に前方後円(方)墳。	
法林寺此奥古墳群 (通称：法林寺古墳群)	本巣市	権現山南麓に位置する横穴式石室を中心とする後期古墳群 全25基(うち4基は市指定史跡)	須恵器
野古墳群	大野町	5-6世紀 全12基(うち9基は国指定史跡) 前方後円墳、円墳、帆立貝形古墳 標高25mの低地に分布する大型古墳群	埴輪、刀、銅鏡、馬具、鉄鏃
カイト古墳群	大野町	6世紀末から7世紀、全64基	
北部山麓古墳群	大野町	6世紀から7世紀に多く造営された可能性	
上磯古墳群	大野町	前方後方墳の北山古墳(県指定史跡)・南山古墳(町指定史跡)、前方後円墳の亀山古墳(県指定史跡)の3基が現存。	六獣鏡・四獣鏡・内行花文鏡など
願成寺西墳ノ越古墳群 がんしょうじにしづかのこしこふんぐん	池田町	5世紀後半～7世紀(6世紀末～7世紀初頭が最も活発に造営) 全111基(県指定史跡)	須恵器・土師器、鉄刀・鉄鏃などの武器、勾玉・耳環などの装身具
昼飯大塚古墳 ひるいおおつかこふん	大垣市	4世紀後半 墳長150mの岐阜県最大の前方後円墳 国指定史跡、2013年に歴史公園として保存整備され公開。	埴輪、勾玉、ガラス玉、土器・土製品、鉄剣・鉄刀、鉄工具など
金生山古墳群	大垣市	金生山および山麓にかけて分布する群集墳。	
象鼻山古墳群 ぞうびさんこふんぐん	養老町	3世紀末から6世紀 前方後円墳、方墳、円墳、上円下方壇等 全約70基 1号墳は最高所に位置する墳長約40mの前方後方墳。東海地方最古級の古墳の可能性。	
円満寺山古墳	養老町 海津市	4世紀 墳長約60mの前方後円墳(海津市指定史跡)	三角縁神獣鏡を含む銅鏡3面、鏃・刀等の鉄製品
瑞龍寺山墳丘墓	岐阜市	金華山南側にある瑞龍寺山山頂の墳丘墓。	
上城田寺古墳群	岐阜市	6世紀から7世紀に多く造営された可能性	

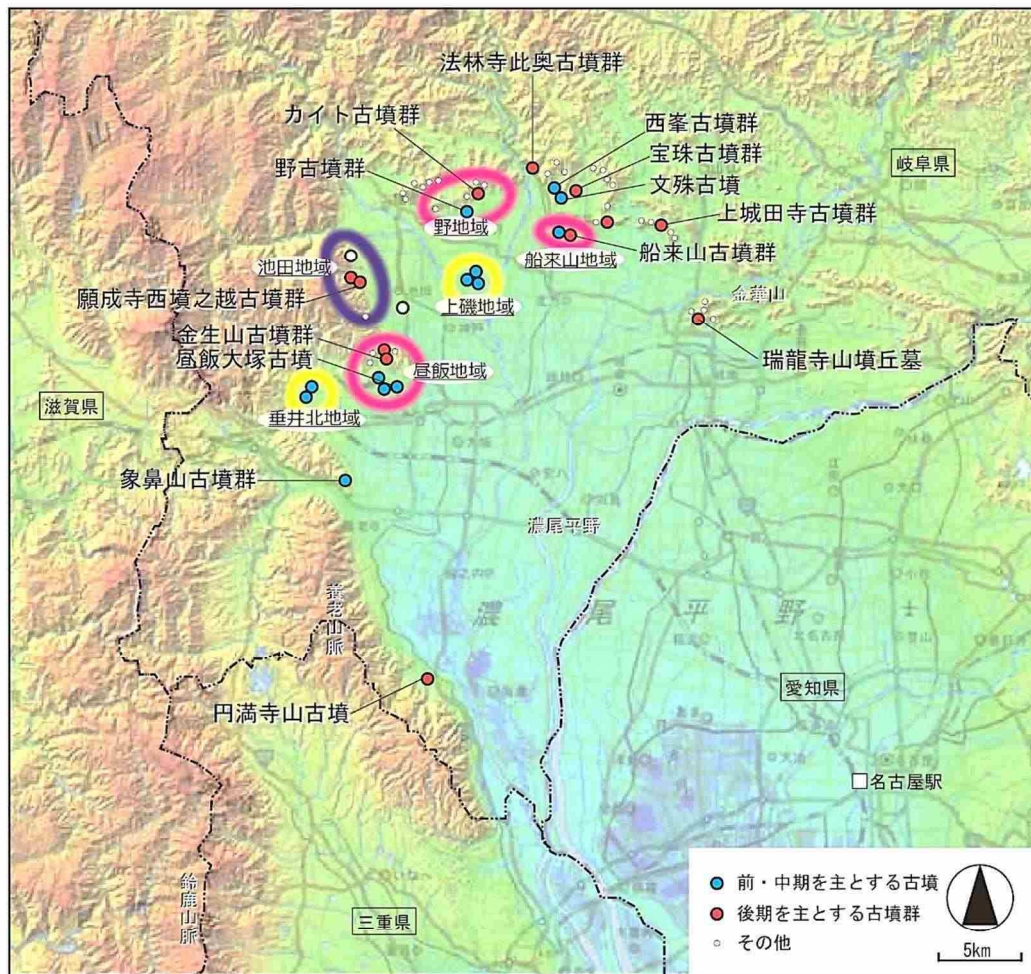


図 4-2 周辺古墳群の分布

②周辺古墳群からみた船来山古墳群の特徴

- 船来山古墳群は、3世紀末より造墓活動が始まり、4世紀末まで前方後円墳をはじめとして活発に造られた。5世紀代は一時期空白期間があるものの、5世紀後半には再び造墓活動が始まり、5世紀末から7世紀にかけて爆発的に古墳が造られた。古墳時代を通じて、同じ墓域（船来山）で一貫して造墓活動が行われた古墳群は、美濃地域でも稀有なものである。
- 5世紀代（中期）に一時収束するという現象は美濃地域全体を見ても同じような傾向がみられ、中期は前期とは異なった地域で造られたようであることが分かってきている。船来山古墳群において中期での造墓活動がほとんどみられないといった現象は、昼飯大塚古墳など一定墓域の中で形成をみる大型古墳群の動向と同じ性質をもつ。（中井 2015）
- 前～中期の古墳と後期古墳の分布状況を比較すると、大きく3つの形態が見られる。（横幕 2015）
 - 前～中期に顕著な古墳が見られ、後期も引き続き近辺で旺盛な造墓活動が展開される地域（図中、ピンクで囲った地域：船来山地域、野地域、昼飯地域）
 - 前～中期に顕著な古墳が見られるも、後期古墳がほとんど顕著でなくなる地域（図中、黄色で囲った地域：上磯地域、垂井北地域）
 - 前～中期にあまり古墳の見られない地域に、後期の古墳が密集する地域（図中、青色で囲った地域：池田地域）
- 船来山古墳群は、後期特に6世紀後半からの爆発的な古墳造営がみられ、美濃地域における後期古墳の事態解明の資源となる。

(3) 船来山における歴史・生活・文化資源

①寺社仏閣

表 4-3 船来山の寺社仏閣

名称	概要
弥勒寺	臨済宗妙心寺派。本尊は弥勒菩薩。慶長年間に、山縣郡下伊自良村東光寺五世、瑞雲宗呈禅師によって、天台宗古寺院の跡地で始められた。宝暦年間に、梁巖義性和尚、東光寺十六世東國和尚の法脈を継いで、今に至るといわれている。上保の領主、大島家の菩提寺。現在の本堂周辺は、弥勒寺遺跡として古代寺院があったとされている。
つきしお 春稲神社（奥の院）	「ツキシネ」は、米に関連する言葉で、もみをすって玄米にし、白米にすることといわれている。昭和4年に社殿・拝殿を新造し、参道を築いた。船来山の中腹に「奥の院」があり、俗に「オイワさま」と呼んで、大岩が祀られている。ご神体である大岩は、席田郡建郡にゆかりのある席田君邇近の墓との伝説もある。
慈雲寺	臨済宗妙心寺派。本尊は観世音菩薩。後土御門天皇1495年（明応4年）、地方檀越によって創建、天縦和尚が開祖したといわれている。
智勝院	曹洞宗の禅寺。本尊は聖観世音菩薩座像で、行基の作と伝えられている。 1771年（寛文元年）当時加納城主松平丹波守光重公により、その祖母智勝院殿悟心理省大姉（於大の方の娘 徳川家康公の養妹松姫）を弔うために建立された寺である。 光重公は、当院を建立すると同時に、寺領黒印五十二石三斗三合を寄付し、爾後代々の墓所とした。墓は本堂西上段に位置し、光重公はじめその子孫代々の墓が立ち並んでいる。北廟には、光重公の子息にあたる北方の旗本戸田氏代々の墓がある。
白山神社	祭神は、伊弉諾尊・伊弉冉尊の二座。 井水鏡に「この神社は、席田一郡の井水守護神の大社である。席田井組村々が、祭礼を営んでいた。御神興の御旅所跡は旧佛生寺村の東にあった（現在は不明）。この神社没倒後、3郷（佛生寺、芝原、石原）に分かれた頃から祭礼は絶えたが、旧石原村の持分として、船来山に修造した。」とある。
八幡神社・北野神社	八幡神社の祭神は慶神天皇。北野神社は八幡神社境内にあり、菅原道真公が祭られている。いずれも由緒不明である。

※主として『本巣郡志上巻』（昭和12年、岐阜県本巣郡教育会編）を元に概要を整理した。



弥勒寺



春稲神社奥の院 大岩（女の神様）



大岩（男の神様か）



智勝院



本巣市観光協会による「美濃本巣の古刹めぐり」の寺院の一つで説明板が設置されている



智勝院本堂の西上段にある光重公や子孫代々の墓



白山神社参道入口



白山神社拝殿



八幡神社

②祭事・言い伝え

表 4-4(1) 船来山に残る祭事・言い伝え

名称	概要
春稲神社の祭礼	祭礼は、毎年12月10日に行われる。神事を執り行う氏は現在48軒。前日の9日から準備したお供え用の料理を持って、真夜中に本殿、奥の院で神事を行い、最後に翌年「とうもろ」を受ける家へお供えを運ばれる。従来は、準備は男性のみで行われ、祭礼の1週間前から夫婦でも別部屋にしていたことや、お供えの「おみごく（おこわ）」は神社の齋田から採れた稲を使用していたこと等、祭礼のしきたりなどが細かく決められていた。現在はかなり簡略化されているものの、これまで信仰の山として船来山の「奥の院」においても祭礼が継続されている。  拝殿  本殿  お供え物：お神酒、もち米みワシ、とうふ、里芋、赤かぶ、大豆、小豆  お供え物：野菜、スルメ、お神酒、洗ったもち米、椎茸、りんご

表 4-4(2) 船来山に残る祭事・言い伝え

名称	概要
山谷地区船来山の 山神様（山の講）	船来山南麓の山谷地区には、古くから船来山の守り神、山神様の信仰がある。江戸時代の終わりか明治時代の初め頃が始まりといわれている。 山神様は、かわいい女の子に嫉妬する女神といわれ、ご神体は「タテイワ」といわれる「山神」と記された石で、「ヤマノコ」と呼ばれている。 山神様は船来山の中腹に長い間祀られていたが、昭和 50 年ごろに山の麓に移動された。さらに平成 13 年度に、元々麓にあったお地藏様とともに公民館にご神体を移されている。 「山の講」とは、山神様に男の子たちがあいさつする行事で、毎年 1 月 5 日に行われていたが、現在は 1 月の第 2 日曜日に行われている。「山の講」は、山神様に新しいしめ縄や飾りをし、お供え物を供える。お神酒をかけ、3 回はやし立てたあと、その場でお神酒を飲み、お供え物を分けて食べてから「トウケ」に戻る。五目飯や煮物、子供たちが好きな料理を女の子とともに食べるという流れで行われる。「トウケ」とは、料理を作ったり、準備を手伝う当番の家のことである。お供え物は白おこわとお神酒で、しめ縄と松の木で作った手作りの男性のシンボルを飾る。 山谷地区は西組、東組に分かれており、山の講はそれぞれの組で行われ、参加者は小学生から中学 2 年生の男の子であった。近年は子供不足から大人も参加し、西組と東組が一緒に行うようになった。平成 13 年度からは「トウケ」の食事当番制はなくなったほか、食事も食堂のお弁当、お供え物であった白おこわも省略され、3 年前からは飾りの男性のシンボルは木製から石に変わり、しめ縄や飾りは当日のみに飾ようになる等、古くからのしきたりから少しずつ変わり、簡略化されつつある。 「山の講」は、地域の楽しみの一つであるとともに、古くから恩恵を受けていた船来山に感謝の思いを伝える大切な行事となっている。



山の講の飾りとお供え物

※岐阜女子大学による民俗調査の成果をもとに概要を整理した。

※お供え物および山神様の写真は、船来山古墳群ワークショップ(2015/9/26)における岐阜女子大学の発表資料より転載した。

③学習・展示施設

表 4-5 船来山の学習・展示施設

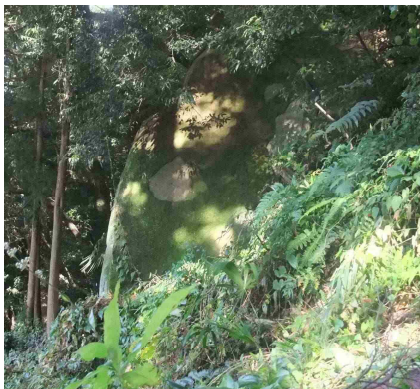
名称	概要
古墳と柿の館	船来山古墳群の出土品と特産物の柿の資料を展示する常設展示館。 1 階は、船来山から出土した縄文時代から古墳時代 7 世紀までの遺物の展示、席田真桑用水の展示のほか、本巣市の自然や文化財をビデオで紹介している。 2 階は、富有柿の栽培と普及に功績を残した松尾松太郎父子の経歴を始め、世界の柿の歴史や柿を利用した製品の展示、柿の写真ギャラリー等がある。
赤彩古墳の館 (272 号墳の移築復元)	船来山古墳群を代表する赤彩古墳 272 号墳の石室を移築復元した施設。 春と秋に一般公開される。
富有柿センター	富有柿の里の拠点施設。旧糸貫町の歴史や文化、農業のあらまし、柿作りについての資料展示や研修施設等がある。
石室復元 (154 号墳の移築復元)	154 号墳の横穴式石室と石棺の移築復元展示施設。6 世紀代の横穴式石室では他地域においても稀にみられる組合せ式石棺で、奥壁とのわずかな間隔から、須恵器など 75 点にものぼる遺物がほぼ手付かずの状態出土した古墳である。
農林業実習センター	都市と農村の交流施設として、農業体験などが催される。研修棟、陶芸館、炭焼館、バーベキューハウスがある。

④その他資源

表 4-6 船来山および山麓のその他の資源

名称	概要
中世の山城 筵田の砦	齊藤道三が伊勢の福島四郎右衛門に宛てた書状（『豊後白杵稻葉文書』）に「次郎は筵田と申在所へ執出候。」とあること、「・・・中頃転地築城、請桑山之城、」（『美濃国古蹟考 卷之四』）といった史料の存在と、J支群で検出された2基の堀切遺構の存在から室町末期から戦国期において美濃守護代にあった土岐氏が船来山に砦「筵田の砦」を築いていたことが推測されている。
近世の石切場	K支群・O支群などで検出されている石切場には、享保年間の刻紋が認められ、江戸中期に名古屋城天守閣修理に伴い、船来山の岩帯あるいは古墳の石室から石材が搬出されたことが示唆されている。 また船来山南端にある智勝院の墓石や礎石、石垣などにも利用されたことが分かっている。 石切場や切り出された石には、クサビを打ち込むための「矢穴」の痕跡がある。
歌碑	「富有柿の里」の園路沿いや東屋の脇、6箇所に船来山や糸貫川を歌枕に詠まれた和歌の石碑が設置されている。
江戸初期の墓地	弥勒寺裏の81号墳上に改変されている墓地には元禄年間のものもあるが、詳細は不明である。
山の神の石碑	弥勒寺谷の谷頭上部の尾根道沿いに「龍神 山乃神」と刻まれた石碑が設置されている。これが置かれた経緯は現在のところ分かっていない。
六地藏	船来山の山裾沿いにあり、通称「六地藏」と呼ばれている。 一部部材が不足しているものの、五輪塔や宝篋印塔といった古い石造の仏塔もある。
船木山焼 ※1	「明日焼」とも呼ばれる陶器で、朝焼の窯印が施されたものもある。古墳時代の土器にも由来するとされ、近世の中頃に再興されたとされている。

※1『本巣郡志上巻』（昭和12年、岐阜県本巣郡教育会編）を元に概要整理した。



八幡神社裏の刻紋のある巨石



八幡神社裏の巨石に刻まれた
「田」の紋



船来山の山裾に残された矢穴のある
切り石（矢穴のサイズで年代が推定
できるといわれている）



歌碑①
席田の 伊津貫川の 河水と
住てふ田鶴と いづれ久しき
(後小松院)



歌碑②
いかなれば 舟木の山の もみぢ葉の
秋は過ぐれど こがれざるらん
(右大弁通俊)



歌碑③
五月雨の 紅葉を染むる ためしあらば
舟木の山の いかにこがれん
(一条兼良)



歌碑④
まかちとる 舟木の山の 夕時雨
そむるもみぢも こがれてぞゆく
(後鳥羽院)



歌碑⑤
席田に 老ひぬる田鶴や 敷き忍ぶ
世々にもあへる よはひ成るらん
(仙洞中御門院)



歌碑⑥
嵐吹く 舟木の山の もみぢ葉は
しぐれの雨に 色ぞこがるる
(権中納言経忠)



船来山山頂付近(弥勒寺谷谷頭上部)の
尾根道にある「龍神 山乃神」の石碑



六地藏





船木山焼の陶器と窯印（神谷保胤所蔵）

※『本巣郡志上巻』（昭和12年、岐阜県本巣郡教育会編）より転載

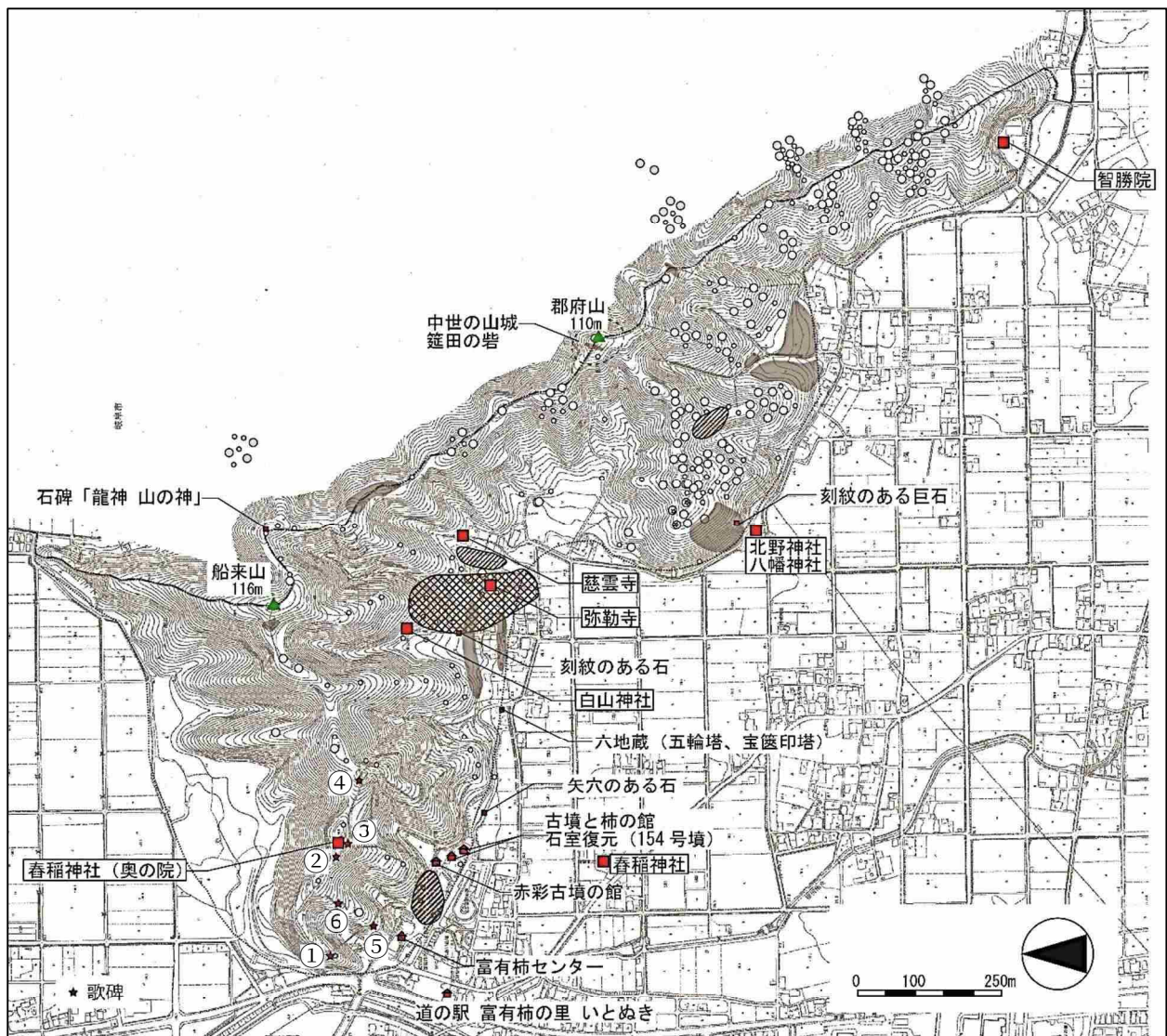


図4-3 船来山の歴史・文化資源分布図

(4) 周辺の歴史・生活・文化資源

周辺に分布する寺社仏閣等の歴史資源・施設、伝統的な祭事や文楽、言い伝えなど、有形・無形の歴史・生活・文化資源について整理する。

①主な寺社仏閣

表 4-7 船来山周辺の主な寺社仏閣

名称 創建年代	概要
国恩寺 平安時代（弘仁）	真言宗醍醐派。境内の本堂前に県指定天然記念物のヒイラギがあり、弘法大師の杖が発芽して成長したという伝承も伝えられ、柊寺とも呼ばれている。
春日神社/仏生寺 江戸時代	由来不詳であるが、美濃国神明帳によると、正六位下春日明神とある。この神社所蔵の棟札は、享保年間の争論により地頭戸田内蔵助の役人の命令により、すべて焼却されたといわれている。 春日神社の祭神と席田用水に貢献した人達へ感謝し、五穀豊穡を祈願する祭事、米かし祭りが行われている。
八幡神社（本殿） 江戸時代（寛文）	現社殿は寛文4年(1664)の再建であるが、所蔵の棟札によれば以後数回修築されている。木造檜皮葺・春日社流造で、斗きょうは桃山時代の遺風を多分に残している。現在は十四条の氏神。
見延北野神社	由来不詳であるが、慶長十二年三月十二日永応(応永か)二年四月五日、寛文十二年二月等の棟札がある。 菅原道真公が祭られている。
八幡神社/上高屋 江戸時代（明暦）	由来不詳であるが、伝承では、明暦2年（1656）の創建といわれている。 その年の農作物の作柄を占う神事、粥づけ占いが行われている。
長屋神社	長屋神社は、伝承では、戦国時代（1532年）、元々「杉之宮」という祠が祀られていた所に相羽城主（現大野町）長屋景興が祇園社の分霊を請け迎えて成立し、その後、現在の地に移したといわれている。
正尊寺 室町時代（文明）	平安時代横蔵寺の末寺として創建されたが、室町時代、文明5年(1473)福井県の吉崎御坊から本願寺8代蓮如上人が遣わした了光坊によって浄土真宗へ改宗再建された。創建当時は川西に寺基を構えていたが、享禄3年（1530）の大洪水で流され、国主土岐頼芸の寄進により現在の中島へ移る。現在の本堂は天保時代に再建されている。
梅英寺 江戸時代（寛永）	寛永7年（1630）大智浄聖石翁が当地へ掌宇を移築。本尊は釈迦牟尼仏。 将軍地蔵尊は、日清、日露戦争の時の戦死者、東海地方3500余柱の遺骨、遺品等で鍊造した地蔵尊。
八幡神社/文殊	由来不詳であるが、社伝によると多田満仲が守護だった時、天徳4年（960）、村上天皇が氏神として崇敬してきた石清水八幡宮を、この地に勧請し、社殿を造営し創られたといわれている。
大亀寺 江戸時代（享保）	享禄元年（1528）、池田郡白樫城主により、この地に文殊院文殊堂を建て、文殊菩薩を安置。元禄年間、岐阜城下発展のため、文殊菩薩を城下に移す。以後170年間にわたり堂の再建なく、地名のみが残る。村の由来を忘れないように、玄洞文亀和尚（開基）は享保6年（1721）文殊堂の再建を祈願し、この地に文殊菩薩が安置され現在に至る。
善永寺 南北朝時代（至徳）	創建は至徳2年（1385）といわれている。 寺宝である「麒麟鐘」は元亀元年（1570）に起こった石山本願寺合戦の際、本願寺側で功のあった土岐蔵人（土岐頼芸の一族）が顕如から受け取ったもので、後に蔵人が出家し善永寺を再興した時に持ち込まれと伝えられている。
祐國寺	本尊は阿弥陀如来。 山口城主古田兵部長女の婿、市右衛門教光が僧となり、当時天台宗の寺院祐國寺に入るが、明応5年（1496）実如上人に帰依し、天台宗から浄土真宗に転じた。この時、上人から阿弥陀如来の画像を授けられた経緯がある。 祐國寺が天台宗として創建された開基年代は不詳。

※主として、『本巣郡志上巻』（昭和12年、岐阜県本巣郡教育会編）を元に概要整理した。

②祭事・言い伝え

表 4-8 船来山周辺に残る祭事・言い伝え

名称	概要
長屋神社の祭礼行事 (馬駆け祭)	岐阜県の重要無形民俗文化財になっている馬駆け祭は、毎年8月2日に行われ、五穀豊穡と無病息災、家内安全を願う祭礼行事で、フィナーレを飾る「馬駆け」では、若武者姿の乗子が馬に乗り境内を駆け抜ける。
春日神社の米かし祭	米かし祭りは、本巣市仏生寺地区で行われる。席田用水に貢献した人達へ感謝するとともに、春日神社の祭神へ五穀豊穡を祈願する祭事で、本巣市指定の無形民俗文化財である。 祭日は古くは3月5日に行われたが、現在は春分の日に行われている。
八幡神社の粥づけ占い	粥づけ占いは、その年の農作物の作柄を占う神事で、旧暦1月15日に行われる。本巣市指定の無形民俗文化財である。 早朝、八幡神社の境内で、竹の束を入れて粥を作り、祈願の後、竹の管の中の粥や小豆の量により、12種類(閏年は13種類)の作物の作柄を6段階に分けて占う。

③学習・展示施設

表 4-9 船来山周辺の学習・展示施設

名称	概要
民俗資料館 (本巣、糸貫、真正)	本巣：旧本巣町の民俗・歴史資料が展示され、住民の衣食住の生活実態の概要を分かる。旧徳山村(現揖斐郡揖斐川町)から移築した民家が展示施設になっている。 糸貫：旧小学校後者を活用し、農耕用具をはじめ、衣食住に関わる民俗資料が収蔵・展示されている。 真正：農耕用具を中心に、旧真正地域の民俗資料が、収蔵・展示されている。 いずれも管理者が常駐していない、狭く老朽化が激しいなどの問題があり、市民に有効に活用されていない点が課題として挙げられている。
真桑文楽展示コーナー (本巣市民文化ホール)	人形浄瑠璃「真桑文楽」の上演を目的に立てられた文化施設「本巣市民文化ホール」に文楽関連の展示コーナーが設置されている。
織部展示館	道の駅「織部の里もとす」内の展示施設。 安土・桃山時代に茶人、陶人、武人として当時の3英傑の信長・秀吉・家康につかえ活躍した古田織部は、千利休の高弟となり、千利休の茶湯を基礎に、茶事や陶芸に自由・奔放の独自の世界を開いた「織部流茶道」の創始者である。 織部焼は、織部釉の美しい緑色などが特徴で、日本を代表する陶芸品であり、茶室をはじめ様々な芸術に影響を及ぼしている。 古田織部という人物を様々な角度から紹介し、織部焼き、織部風の茶室及び茶道などを知ることができる展示施設となっている。
徳山の家	旧徳山村(現揖斐郡揖斐川町)から移築した神足家の民家。本巣民俗資料館の展示施設として活用され、江戸時代から昭和初期までの民具や農耕道具、山村の生産用具などが展示されている。
高木貞治博士記念室 (糸貫老人福祉センター)	本市出身の世界的な数学者である高木貞治博士の資料を収蔵・保管・展示している。糸貫分庁舎南の公民館の一室にある。

④その他資源

表 4-10 船来山周辺のその他資源

名称 時代	概要
宗慶大塚古墳（大塚古墳公園） 古墳時代	開化天皇の孫である^{かむおおのみのこ}神大根王の子孫の墓との伝説があり、およそ 1600 年前のものと推定される岐阜県を代表する前方後円墳である。 昭和 63 年に、周濠の範囲確認調査が行われ、墳長東西 63m、西後円部直径 42m、同高さ 4.2m、東前方部幅 31m、周濠幅 9～13.4m の古墳であることが判明した。周濠からは、底部穿孔壺のほか、S 字状口縁台付甕、高坏など、3 世紀末の古式土師器が出土した。 本巣市では、平地部にある唯一の古墳である。 現在は、古墳の周りを「大塚古墳公園」として整備され、周濠跡は散策道として復元されている。 県指定史跡である。
東山道跡 奈良時代	律令制下に設けられた古代七官道の一つ。現在の近畿地方から中部、関東地方の山沿いを経て、東北地方の諸国を結ぶ重要な交通路であった。東海道が主として海辺に沿って通じているのに対して、東山道は低湿地をさけ山地帯を通じていたので「山の道」また「山道」「仙道」と呼ばれた。仙道上、仙道下という地名はその名残である。五里（20km）ごとに駅が置かれ、馬をつなぎ、旅人の休み場にもなった。
山口城主居館跡 安土桃山時代	山口城主であった古田氏の居館跡。 敷地内には、「史蹟山口城主館跡 安土桃山時代の茶匠古田織部（1584）の館跡」の石碑が建っている。 道の駅「織部の里 もとす」・樽見鉄道織部駅西側に位置する。
法林寺古墳群 古墳時代	奈良尾神社や毘沙門堂の裏山、山口城跡付近にかけて、約 25 基の古墳が発見されている。これらの古墳群の多くは円墳で、横穴式石室が採用されている。築造時期は、6 世紀から 7 世紀にかけての古墳時代後期とみられる。 これらの古墳のうち、1 号墳、3 号墳、4 号墳、6 号墳が市指定の史跡である。
山口城跡 戦国時代	古田氏を城主とした山口城の城跡である。曲輪、虎口、井戸などの遺構がある。文殊の森公園内にあり、眺望がよい。
法林寺城跡 戦国時代	古田氏を城主とした法林寺城の城跡である。曲輪、堅堀、堀切、土橋などの遺構がある。文殊の森公園内にある。
祐向山城跡 鎌倉・室町・戦国時代	1201 年頃、権中納言・源定家が美濃介に任ぜられた時、築城した。 承久の乱後、弘安年間（1278～87）清和源氏・源義光の子孫・藤原泰綱が美濃国守護に任ぜられた際居城としたといわれている。 室町時代には、長井一族が居城した。 土岐氏の砦であるともされる。

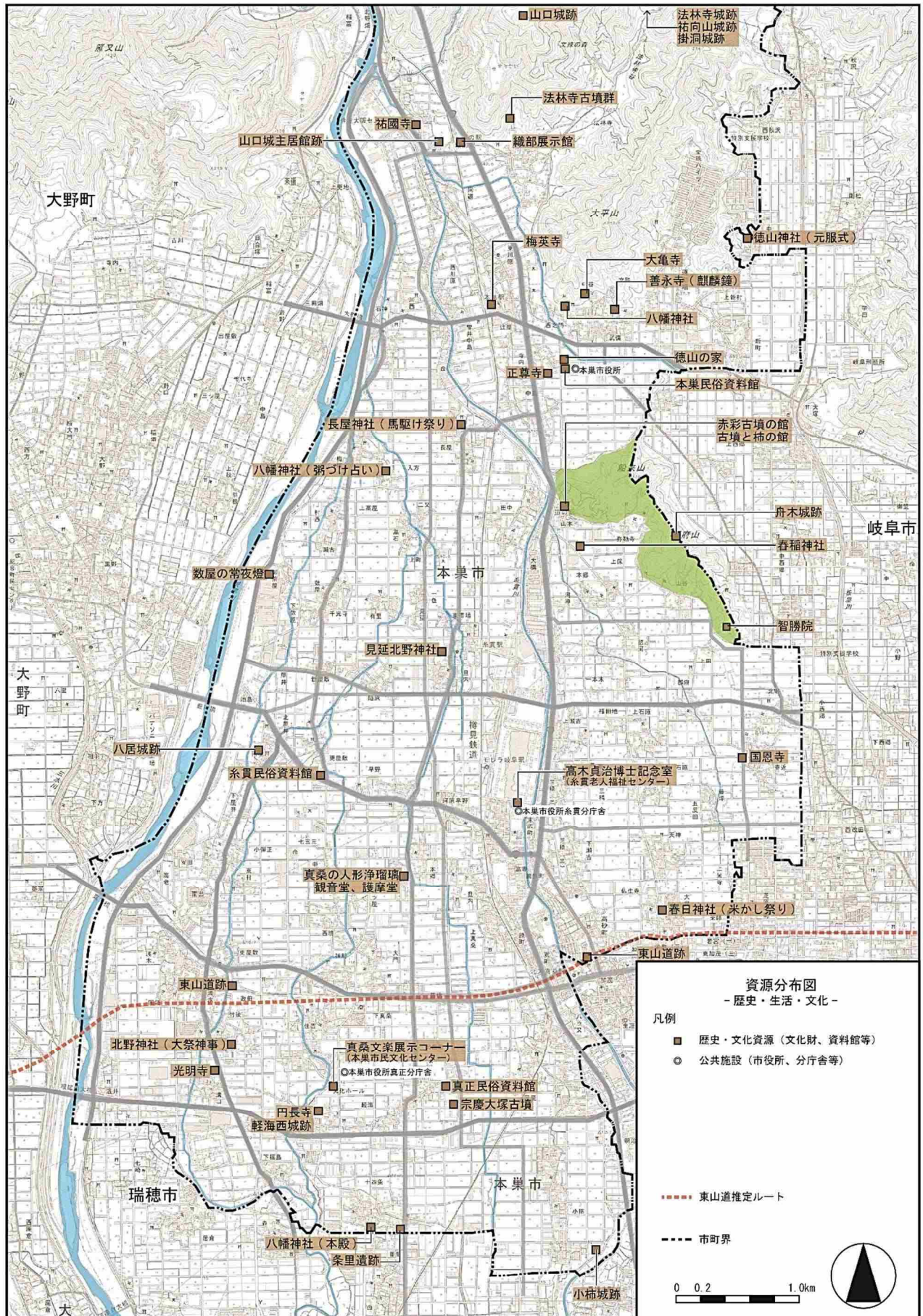


図 4-4 周辺の歴史・文化資源分布図

(5) 船来山および周辺が詠まれた・描かれた史料

(催馬楽、歌枕、緑樹亭五峰嶋隆 船来山十二景(桑山十二景)、蓑虫山人作船来山図絵)

船来山および周辺は古来、歌に詠まれてきた。

安和2年(969)には関白太政大臣藤原実頼の屋敷で催された新年祝賀において、席田の糸貫川に住む鶴を歌った催馬楽の曲が歌われたとする記録がある。催馬楽の曲目全61曲のうちに「席田」は数えられ、「貫河」(ぬきがわ)という曲目も糸貫川から取られたとする説もある。11世紀初頭に成立した『枕草子』の第62段でも「いつぬき川」が催馬楽に歌われているものとして言及されている。

催馬楽「席田」(むしろだ)

(一段) 席田のや 席田の いつぬき川にや 住む鶴の

(二段) 住む鶴のや 住む鶴の 千歳をかねてぞ遊びあへる
萬代かねてぞ遊びあへる

続く時代には歌枕として知られる地名となっており、「舟木の山」は「もみじ葉」など、「いつぬき川」や「席田」は「田鶴」などととも歌われている。例えば、文永5年(1473)一条兼良の旅行記「ふぢ河の記」には「舟木の山」「いつ貫川」「席田」がそれぞれ歌われている。ほかにも後拾遺集の右大弁通俊や新勅撰集の権中納言経忠に「舟木の山」が歌われている。

いかなれは 舟木の山の もみち葉の 秋は過くれと こかれさるらむ
右大弁通俊 後拾遺集

嵐吹く 舟木の山の もみち葉は しぐれの雨に 色そこかかる
権中納言経忠 新勅撰集 秋

五月雨の 紅葉を染むる ためしあれば 舟木の山は いかにこかれむ
一条兼良 藤川記

このように中世を通じて催馬楽や和歌に船来山および周辺が詠みこまれていることから、この地域が都を中心とする中世文化の文化圏にあったと考えられ、古墳時代から古代に続く時代において成立していた中央と船来山および周辺との文化的な交流が背景にあったと思われる。

また、近世後期には、寛政12年(1800)、本巢郡西郷(現岐阜市内)の緑樹亭五峰嶋隆の作となる「桑山十二景」が出版された。

この中で、船来山および周辺にある、「定家岑」、「船木山」、「八幡宮」、「明日焼」、「伊吹」、「稲葉山」、「糸貫川」、「北野森」などの12の名所や名物に寄せて、五絶と俳句が詠まれている。歌枕の時代の和歌に因んで詠まれているほかに、この地域の実景もふまえて歌われていると考えられ、遠くは西の伊吹山や東の稲葉山(金華山)から、船来山を構成する峰や沢まで、当時の歴史的な環境を窺い知ることができる。

第十景として「山西古墳」の題で、五言絶句「芳艸山西径 古碑空占春 可憐墓前樹 花発為誰新」と俳句「誰か蒔し 涙のたねや 塚の花」が詠まれており、船来山と推測される山の西側に小径があり、その道をたどると古碑や墓や塚があり、周囲に花木が植えられていた情景が現れている。

蓑虫山人は、天保7年(1836)に美濃国安八郡に生まれ、江戸時代末期から明治期にかけて諸国を

放浪し、各地の風俗を記録している。船来山についても、蓑虫山人作の図絵が残されている。

この船来山図絵は、船来山および周辺が歌枕の時代の景観をふまえて、山人の見た明治期の実景も描かれていると考えられ、妙法山正傳寺の境内から糸貫川を眺望した図として、伊吹山や金華山の遠景や眼下の席田の里のほか、近景に船来山が描かれている。



図 4-5 蓑虫山人作 船来山図絵（岐阜市歴史博物館蔵）

※『古代と未来のかけ橋 船来山古墳群』（2015年3月、本巣市教育委員会社会教育課）より転載

2 自然的環境

(1) 立地

船来山は、北方に連なる美濃山地の南端から独立する標高約 116.5m の小丘陵であり、濃尾平野の北端部、根尾川左岸に位置する。

根尾川が山地から平野部に移る山口付近を扇頂として形成された根尾川扇状地であり、船来山周辺の平野部では、古くから水田や果樹園などの耕作地が広がっている。

(2) 地形・地質

船来山は南東から北西、北西端で北と西方向にのびる主尾根からなり、主尾根から直交して支尾根が細かく舌状に伸びる。

標高 116.5m が最高（船来山山頂）で、南東に伸びる主尾根中央部に郡府山と呼ばれる 110.0m の小ピークがある。このほか、八幡山、桑山といわれる小山の連なる丘陵となっている。

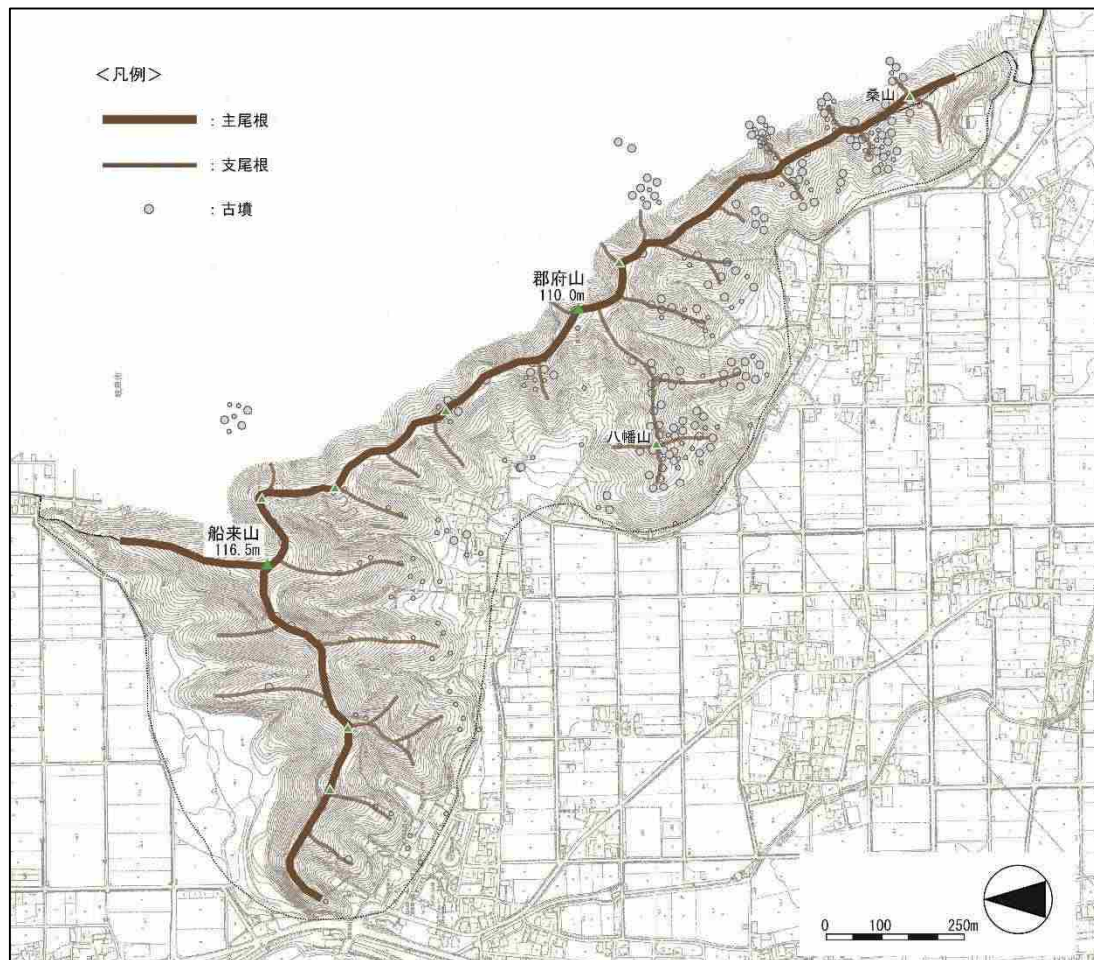


図 4-6 尾根の構成

船来山は、古生代地層の硬砂岩が主体を占め、一部に軟砂岩、粘質系岩が分布している。八幡山以南は、青色硬砂岩が多く、各所で採石の跡が確認されている。

表層地質は、北部の船来山と中央部の八幡山以南に二分し、それぞれ根尾統、外山統としている。その土壌断面を比較すると、角礫の混ざり方が多少異なる。根尾統には角礫が極めて少なく、外山統には多い。

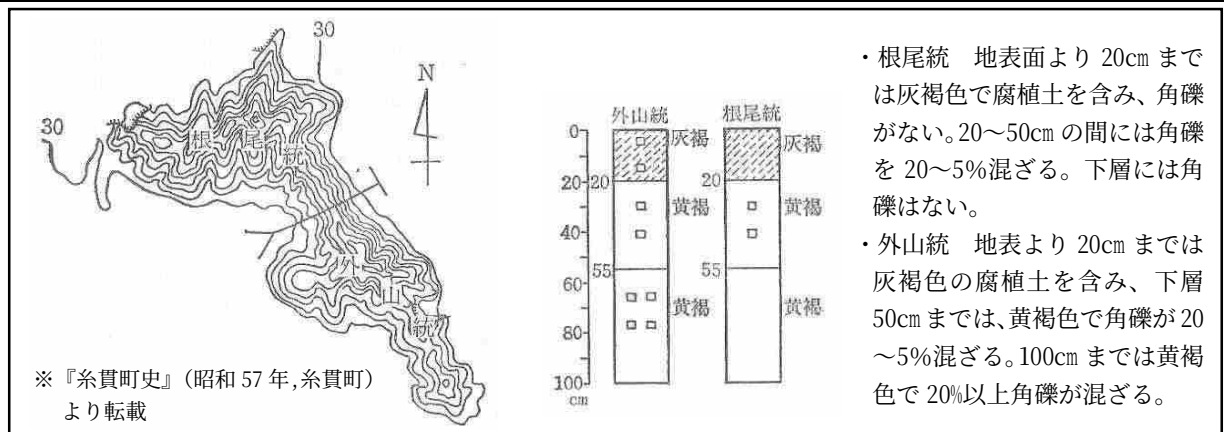


図4-7 船来山の表層地質図と土壌断面柱状図

船来山は、山全体が東西に伸びる砂岩の脈岩でなるという地質的特長から古墳時代後期以降、石材が多種多様に利用されてきた歴史があり、「石材集積地としての船来山」が特色として見出される。

- ・古墳時代は石室の材料の「石取場」
- ・八幡神社東側急斜面は、伝承として「御用石切場」との話があり、横穴式石室の石材他、露頭の石材が名古屋城石垣の石材として利用
- ・智勝院の墓石や礎石、石垣などに利用
- ・「石切場」露頭の岩塊表面に刻紋検出

(3) 水系

揖斐川水系根尾川が市西端を南流している。根尾川と船来山との間に支流の糸貫川（席田用水）が流れるが、1530年の大洪水により本流が藪川（現在の根尾川）に移るまでは根尾川の本流であった。

船来山南部の扇状地には多くの旧河道痕跡、荒廃湿地、自然堤防が残されており、古代以降、幾度も流路変更があったことがうかがえる。

このような扇状地という自然条件は、この地域で平地に古墳がほとんど造られず（宗慶大塚古墳のみ）、丘陵地であるふなきやまに古墳群が形成された要因の一つであると考えられる。

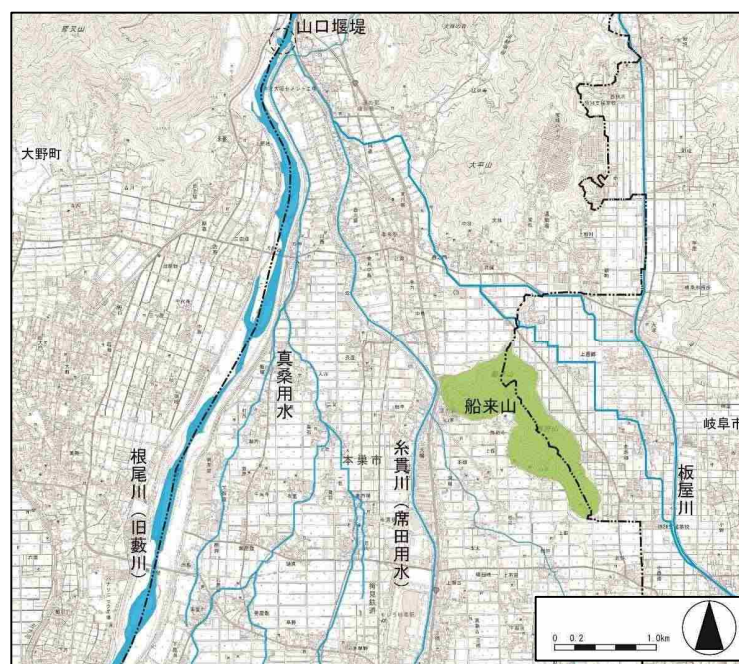


図4-8 水系図

①揖斐川水系根尾川（旧藪川）と糸貫川（席田用水）の変遷

今から約 500 年前の根尾川は、現在の糸貫川筋を流れていたが、1530 年 6 月 3 日に起こった大洪水により現在の川筋に変わったとされている。その後も、根尾川の出水、増水は毎年起こり、そのたびに堤防が切れ大きな被害を受けていたが、昭和初期からの河川改修により水害から守られるようになった。

1530 年の大洪水により、山口の西にあった藪村を押し流して新しい川をつくり、さらに西南の数十ヵ村を破壊して現在の根尾川が新しい主流となったため、押し流された藪村にちなんで、藪川と呼ばれるようになった。

その後、席田井組（旧糸貫町の旧席田村などの村々）により、山口で根尾川を堰きとめて、そこに「一ノ井大堰」を作り、川の流れを変えて、農業用水を取り入れていた。江戸時代になると、十分な農業用水を取り入れることができなかった真桑井組は、両者が水の取り分をめぐり農民同士の争いや「井頭」による話し合いなどが行われたが結論が出ず、結局幕府の決定により 1641 年、席田井水方と真桑井水方、6 対 4 の割合で時間によって交代で根尾川の水を分け合うため「番水」を設けるようになった。

1944 年の根尾川改修で根尾川から糸貫川を完全に締め切り、水門を設け席田用水として利用されるようになった。

現在席田用水は、「岐阜県の名水 50 選」、農林水産省「疏水百選」に選定されている。

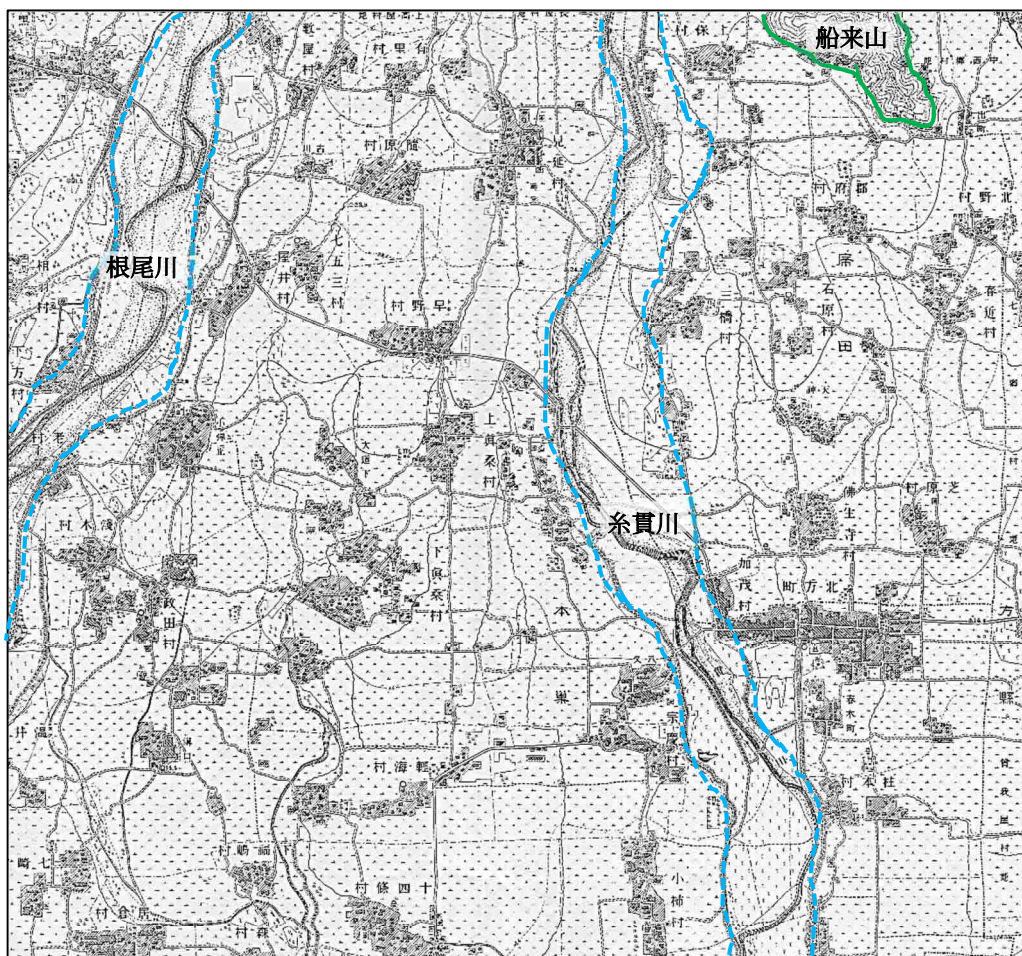


図 4-9 廃川前の糸貫川と周辺の扇状地の土地利用（明治 24 年測量）

※『正式二万分一地形図集成中部日本 3』（2003 年）より複製したものの一部加筆

②船来山の水系（谷筋）

船来山の地形をみると、小ピークが連なる丘陵地形をなしており、その間に谷が細かく入り込んでいる。

流水が確認できる谷は、弥勒寺谷と山谷地区の谷である。

また南麓の標高 30m 付近では、山の伏流水（地下水）が湧出する崖錐泉がみられ、この地域の共同井戸として生活に活用されていた。日当たりも良く、生活用水が確保できるこの地域では古くから集落が成立していたことにもつながる。

<山谷地区北洞の山崩れ被害>

船来山は戦前～戦中までに柿園造成のための開墾が進んだため、雨による表土の流出が激しく、山崩れの被害も起きている。

山谷地区北洞では、昭和 51 年 9 月 11 日山崩れが発生している。大型台風によって数日にわたり降り続いた豪雨（山崩れ発生までに 494mm の降雨）により、大きな崩落が発生した。この区域の林相は、柿が 4 割、雑木が 6 割で、崩落が起きた両側の丘陵は比較的耕作中の柿畑が多かったが、崩落の上部では放棄された柿畑跡が雑木の茂みになっていた。

この地域は往時に採石石切り場であったことが考えられ、そこを基盤に雨水がたまり、さらにこうした柿畑の荒廃や、自生する山芋の大きな掘り取り穴が雨水でクサビとなり、保水限界を超えた基盤上の土壌が一気に崩れだしたとされる。

現在北洞は、砂防指定地に指定され、砂防施設が整備されている。

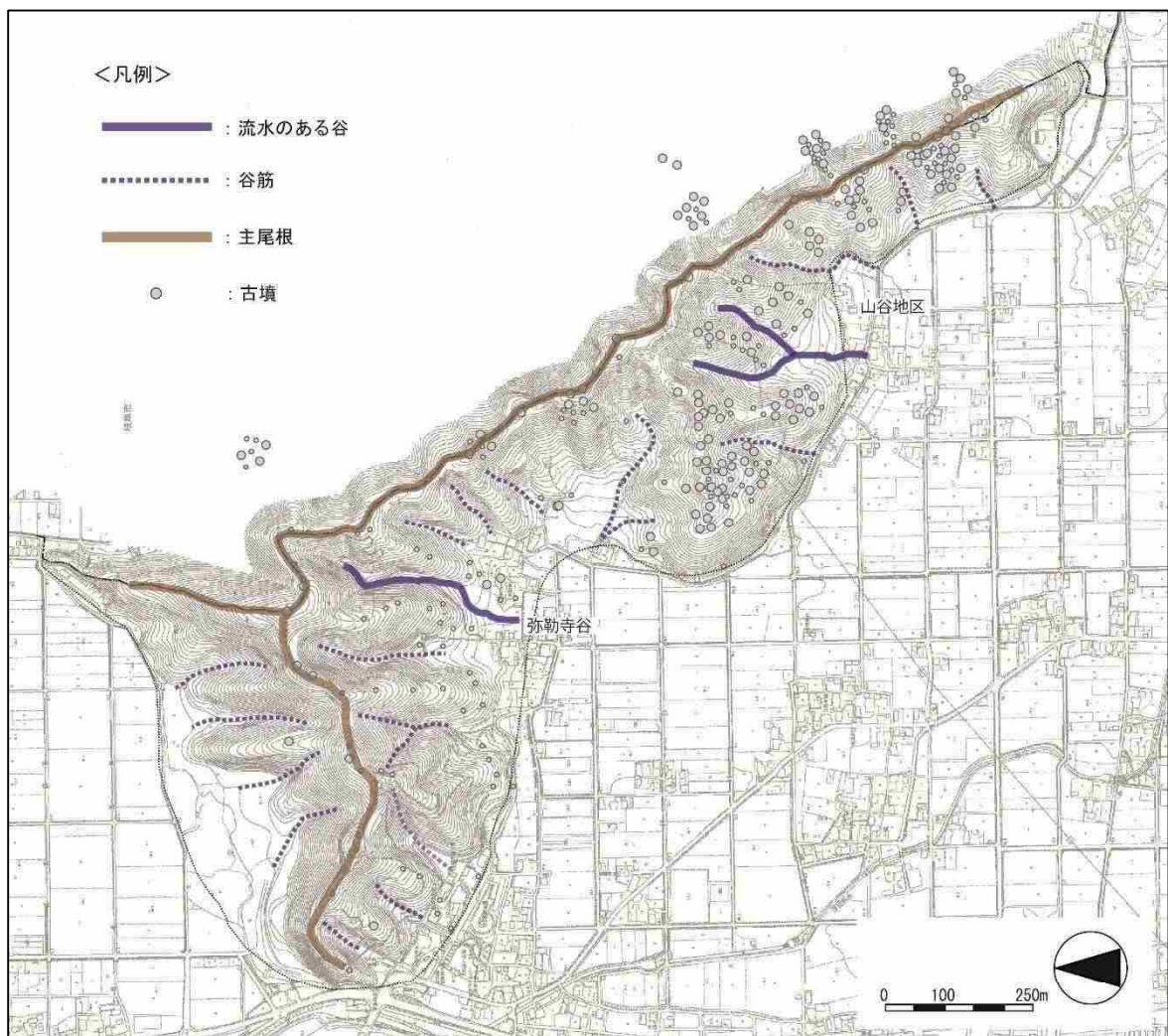


図 4-10 船来山の水系

(4) 植生・植物相

①船来山における近現代の植生の移り変わり

船来山では、明治末期から始まった富有柿の栽培により、最盛期には広い範囲が柿畑として開拓されたといわれている。

図4-11の航空写真から土地利用の変遷をたどると、戦後も昭和50年代頃まで盛んに柿栽培が行われたが、その後徐々に減少し、現在は一部の斜面・山麓に残すのみとなっている。航空写真の樹林の高さなどの様子から、船来山の南麓斜面を中心とする本巢市側では、いわゆる薪炭林としての里山林ではなく、ほとんどが柿畑として利用されていたことが分かる。しかし柿栽培最盛期であっても、智勝院や春稲神社(奥の院)をとりまく樹林は開拓されることなく樹林として維持されてきた様子が分かる。

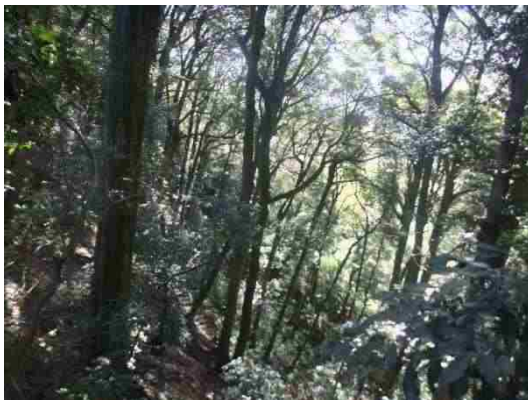
また昭和60年代になり船来山での柿畑が徐々に減少してくる一方で、平野部では徐々に増加する様子も見受けられる。

現在の植生は、図4-12 植生図(第6回自然環境基礎調査、2000年調査、1996年4月撮影の航空写真使用)によると、南斜面や谷筋を中心にコジイ林、北東から北西斜面の多くをコナラ林が広がっている。

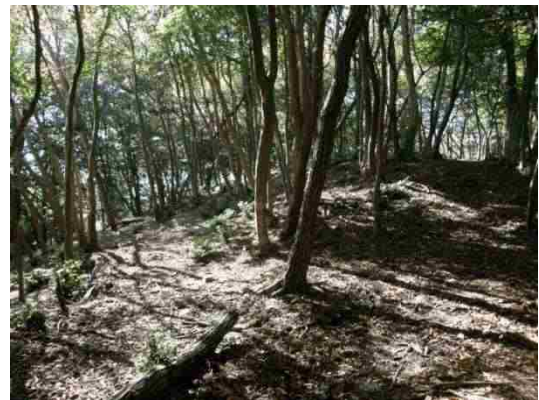
植生図の凡例38 低木群落は、船来山では比較的最後まで柿栽培が行われた場所に分布しており、栽培終了後、先駆性の植物が生育し樹林化への遷移途中の植生と考えられる。また元々柿栽培が行われていたエリアには、古墳も多く分布しており、発掘調査に伴う樹木伐採等の改変が加えられていることも、低木群落が広がっている要因と考えられる。(図4-11の2008年の航空写真からも、1996年に発掘された0支群等、樹林が伐開された後の状況が確認でき、草地や低木群落が広がっていることが分かる。)

一方、早くに柿栽培を終了した場所や発掘調査が実施されていないエリアは、既にコナラ林やコジイ林へ遷移が進行している。

現地調査では、主に山麓で拡大する竹林が顕著にみられ、管理がなされていないため高密度で倒木も多く、鬱蒼とした印象であった。尾根周辺のコナラ林では、枯損木が多くみられ、倒木や落枝の危険性が示唆された。



コジイ林



山頂部周辺のコナラ林



赤彩古墳周辺の植生



比較的最後まで柿栽培が行われていた山頂近くの斜面地の植生



山頂周辺に残る柿畑跡地の石積みと現在の植生



船来山の農業振興地域農用地区域に残る柿畑。現在は管理されていない。



弥勒寺北部に広がる竹林の様子



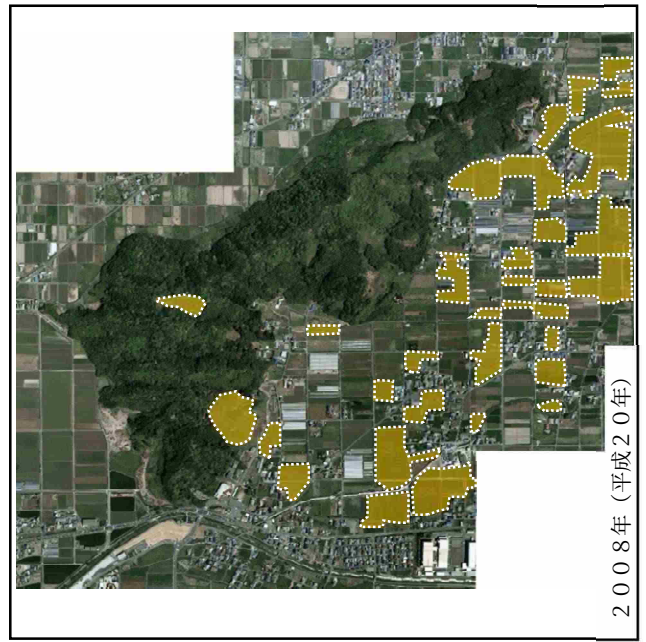
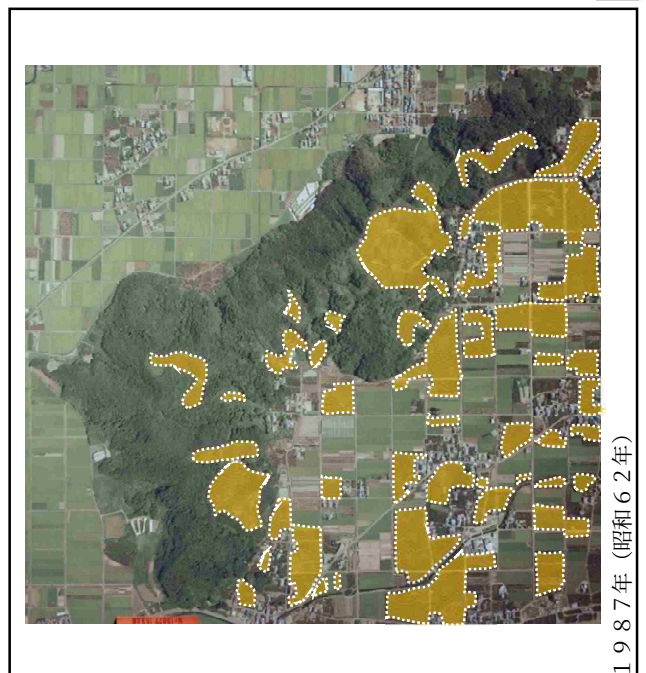
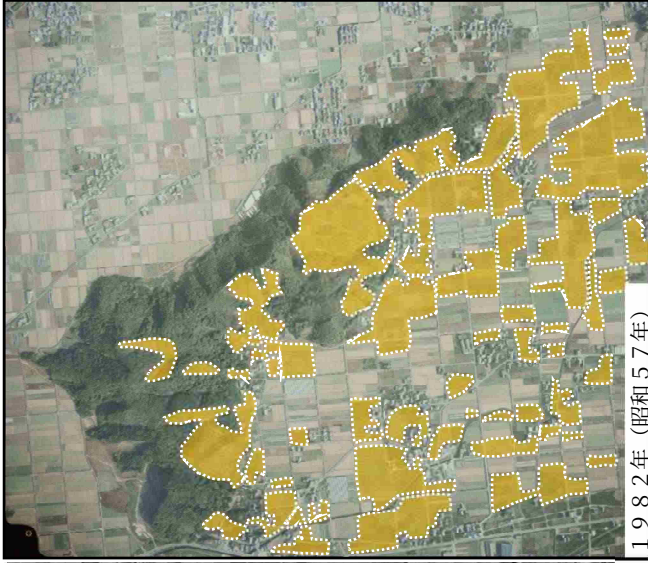
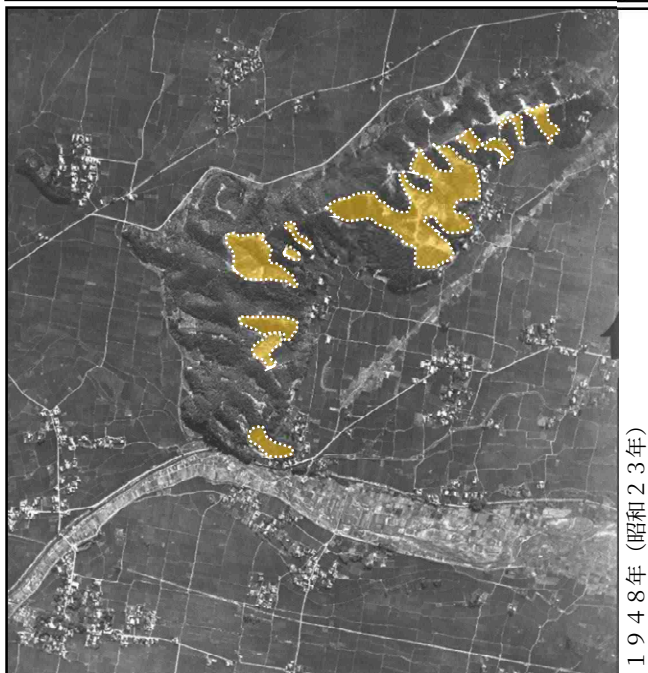
船来山山頂から西にのびる尾根上のコナラ林内の様子。枯損木や倒木が多く見られる。

②船来山の特徴的な植生

船来山の特徴的な植生は、コジイ林である。コジイ林（カナメモチーコジイ群集）は、ヤブツバキクラス域の自然植生で、中部地方以西の花崗岩基盤地を主とする乾性立地に成立する常緑広葉樹林である。急斜面にみられ、社寺林等として孤立して分布していることが多い。



智勝院と背後のコジイ林



- ・航空写真より、柿畑の土地利用と思われる範囲をトレースした。
- ・昭和50年代頃まで柿栽培が盛んに行われていたことが分かる。その後徐々に減少し、2008年時点では一部の斜面や山麓に残すのみとなっている。
- ・一方で、船来山南麓平野部での柿畑は、現在も持続している様子が分かる。

※ベースの航空写真は国土地理院ウェブサイトの地図データを使用した。

国土地理院ウェブサイト

<http://maps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>



図4-11
航空写真にみる船来山の土地利用の移り変わり

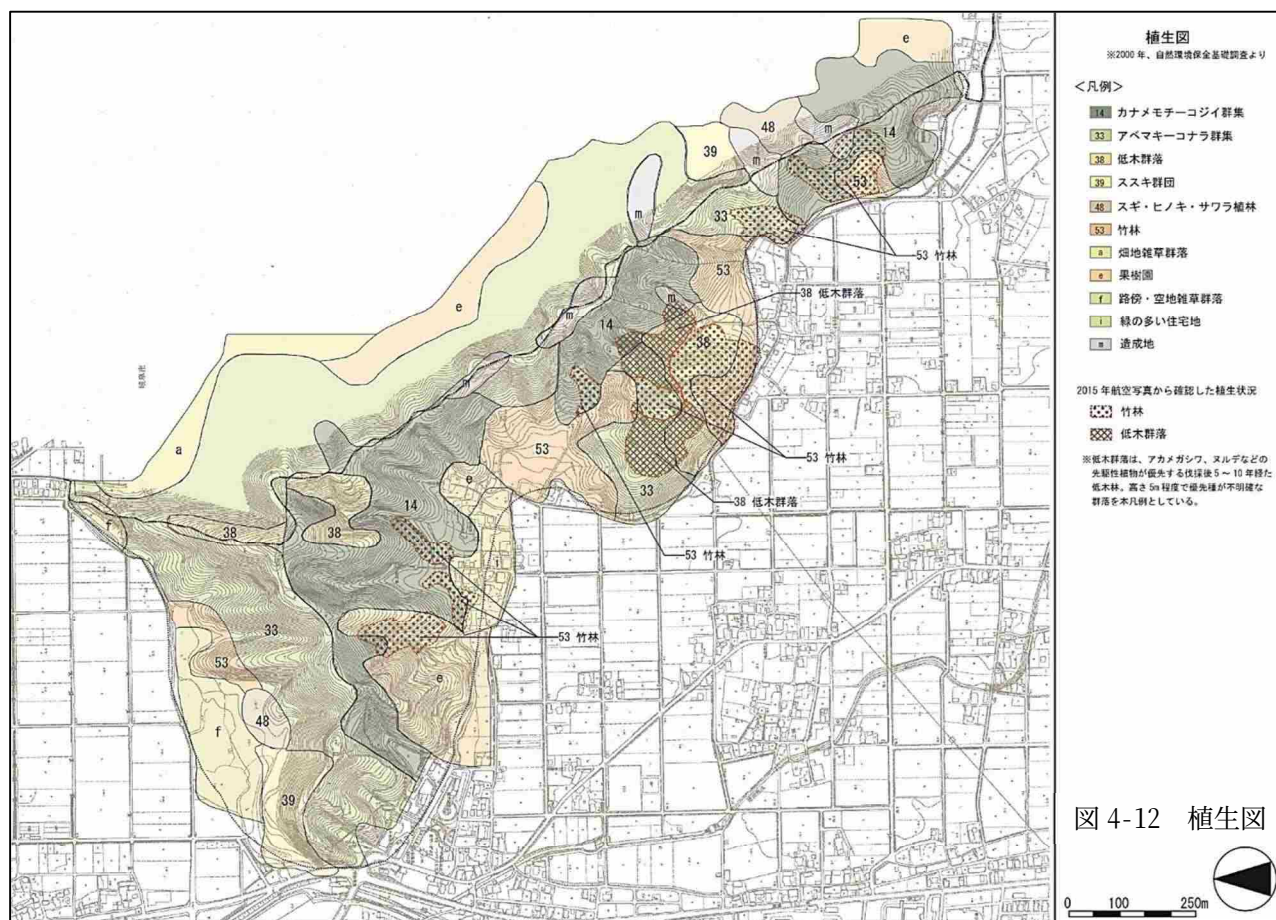


図 4-12 植生図

③岐阜農林高等学校による植物調査

船来山の植物に関しては、岐阜農林高等学校が岐阜大学応用生物科学部加藤准教授指導のもと、2015年に調査を実施している。

調査は、相観の異なる樹林3箇所でコドラートを設置し、樹種および胸高直径（直径3cm以上のものを対象）を記録するという内容で行われた。また事前の概査の中で確認した植物相を記録している。

以下、その結果概要を示す。

【各コドラートのまとめ】

- ・第1プロット
：コジイを主体とする、自然度の高い植生
- ・第2プロット
：コナラと株立ちのヒサカキを主体とする、里山的な利用があった植生
- ・第3プロット
：近年の整備に伴い植栽された種を含む植生

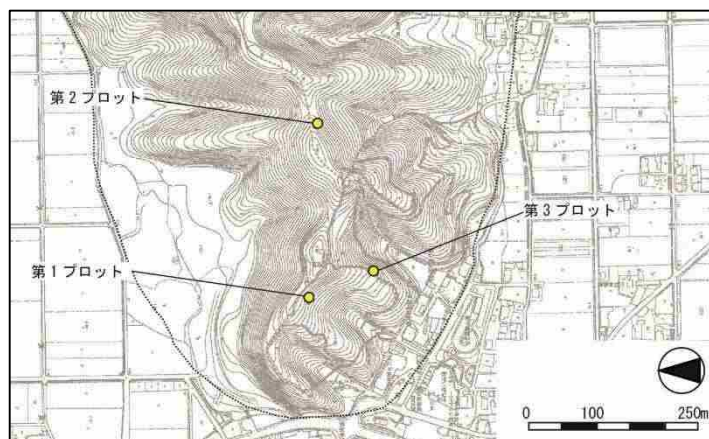


図 4-13 コドラート位置図

表 4-11 植物調査結果概要

種名	第1プロット (6/1 調査)		第2プロット (7/10 調査)		第3プロット (9/11 調査)	
	本数	胸高直径 cm	本数	胸高直径 cm	本数	胸高直径 cm
コジイ	10 本	3.0～65.5	3 本	4.6～29.2	9 本	2.2～19.4
アラカシ	5 本	3.9～10.4	9 本	2.8～14.2	3 本	3.1～4.8
カナメモチ	2 本	8.9, 9.8	1 本	9.4		
クロガネモチ	1 本	23.9	1 本	4.1	2 本	6.3, 11.0
サカキ	9 本	4.7～12.8	2 本	3.0, 3.9	1 本	5.2
ヒサカキ	4 本	3.9～5.1	89 本	3.0～37.8	2 本	4.9, 8.3
ソヨゴ	1 本	8.7	6 本	3.7～24.1		
アオハダ	3 本	6.7～11.1				
コナラ	3 本	18.5～35.6	10 本	8.3～51.7	1 本	34.1
ヒノキ			1 本	26.2		
カキノキ			3 本	4.0～11.0		
ウリカエデ			3 本	7.7～12.1		
ウワミズザクラ			1 本	4.6	1 本	2.5
コシアブラ			2 本	8.7, 11.0		
ネジキ			1 本	7.7	1 本	11.0
タカノツメ			2 本	4.3, 4.8		
ヤマモミジ					7 本	2.6～7.1
ヤマハゼ					2 本	2.3, 3.1
コブシ					1 本	7.0
ゴンズイ					1 本	5.8
ムラサキシキブ					1 本	2.5
エゴノキ					1 本	3.7
カマツカ					1 本	5.4
ナナカマド					1 本	6.4
サクラ類					1 本	2.7
種名不明	1 本	8.7				
	計 9 種 39 本		計 15 種 134 本		計 17 種 36 本	
樹林の概要	自然度の高い林分、急傾斜、17*15m ・コジイを主体とした樹林 ・金華山の植生に似た自然度の高いエリア		株立ちのヒサカキが多い林分、緩傾斜、15*20m ・コナラとヒサカキ (H3-4m 程度) を主体とする樹林 ・林内暗く、草本層は乏しい ・ヒサカキは、萌芽更新により株立ちが多い ・里山的利用がされていた		植栽種の多い林分、園路沿い、30*5m ・落葉樹多い樹林 ・コナラ以外は、あまり大きい樹木はない ・樹間狭く、鬱蒼としている。 ・コブシ、ゴンズイ、ナナカマド等、植栽された種が多い。	

※本数は、胸高直径を測定した幹、枝の数

※岐阜農林高等学校より調査結果データをいただき、表に整理した

(5) 動物相

船来山に生息する動物相については、岐阜農林高等学校が植物調査を実施した際に記録された種類およびその他の目撃情報等を元に整理する。

里地・里山でみられる一般的な種類のほか、鳥類のサシバやフクロウ、オオタカといった貴重な猛禽類が確認されている。

これらは、田畑や草地、周辺の森林に生息するカエル類、ヘビ類、トカゲ類、モグラ類、昆虫類を主なエサとする。里山に生息する様々な小動物を餌にしていることから、里山生態系の指標種と言われている。

里山地域の生態系における上位性の種類は、市街化が進む市南部では、農地や水辺、樹林等の多様な環境が残り、エサとなる下位の動物相の生息が充実していると捉えることもできる。

一方、近年、サルやイノシシ、シカといった大型哺乳類が確認されるようになり、近隣の人家や田畑への被害が懸念されている。船来山が里山として利用がされず管理されなくなったことにより、北部の山地帯から移動し住み着くようになり、動物の生息に影響していることが考えられる。

表 4-12 船来山の動物相

分類	種名
哺乳類	タヌキ（溜め糞）、サル、シカ、イノシシ（ヌタ場）、キツネ
鳥 類	トビ、ムクドリ、ホオジロ、キジバト、サシバ、フクロウ、オオタカ※
爬虫類	ニホントカゲ、ヒバカリ、ニホンマムシ
両生類	アマガエル
魚 類	—
昆虫類	ノコギリクワガタ、スジクワガタ、コクワガタ、カナブン、オオスズメバチ、マイマイガ、クロアゲハ、チャバネゴキブリ
甲殻類	サワガニ
多足類	ムカデ、ヤスデ

※地元鳥愛好家によると、オオタカは、以前営巣していたが、現在は渡りの中継地点として船来山が利用されているとのこと。

（6）景観

船来山周辺は、田園や富有柿の畑などの農地が広がり、親しみを感じる伝統的な農村景観となっている。

船来山は、平野部の農村集落の背景の緑となり、農地を流れる糸貫川（席田用水）などの水辺とともに、人と自然が共生する農村・里山景観を創出する重要な景観要素となっている。

また、農村風景の広がる濃尾平野を一望できる視点場である。

『本巣市景観計画』においても、「船来山等の里山」の緑と視点場としての「船来山」が市の重要な景観要素として位置づけられている。

このように、現在も変わらない平野部からの視認性、および、視点場としての特性をもつ船来山は、古墳群の形成に深く関係していると考えられる。

図 4-14 に船来山における主な眺望地点と景観の概要を示す。

図 4-15 に平野部からみた船来山の景観の概要を示す。



上保の農地からみた船来山



上保の柿畑と船来山



船来山山頂付近からの眺望



赤彩古墳付近からの眺望

